

# 山と博物館



天然記念物ライチョウのひな(ふ化直後)

第6巻 11号 特集号

大町山岳博物館

# 目 次

表紙(カラー) ライチョウのヒナ		針ノ木調査の思い出	
博物館10周年を迎えて	松田 正人……………1	山崎 淳……………20	
10周年を迎えた山岳		奥黒部雨量観測の思い出	
博物館に寄せて	徳川 宗敬……………1	柳沢 幸治……………21	
10年に寄せて	西沢権一郎……………2	八方山研究登山の思い出	
針ノ木自然国の事業		太田 愛子……………22	
主体について	羽田 健三……………2	新しい動物園の構想……………23	
博物館に望むこと	古賀 忠道……………4	山博学芸員の仕事	高橋 秀男……………25
10周年を迎えて	福岡 孝行……………5	博物館の思い出と展望(座談会)……………26	
山博10周年を迎えて	沼田 真……………7	10年のあゆみに寄せて	
10周年を迎えた山博に		幡野 茂道・平林 泰雄……………29	
寄せて	田村 剛……………8	伊東伊三郎・阿部西与・古川 潔……………30	
全国博物館活動の10年	鶴田総一郎……………9	広瀬 英吉・奥原 一登……………31	
10年のあゆみ……………10		博物館の施設・予算・国庫補助金・観覧者……………32	
一回想一 開館の頃	石原 守明……………17	職員在職状況・顧問・嘱託・調査員名簿……………33	
新館移築のこと	伊藤 半二……………18	協議会委員名簿・博物館備品……………34	
山の自然科学教室の思い出		博物館資料・編集後記……………35	
印東 弘玄……………19			

## 発 刊 に あ た り

### 三 沢 巖

10周年記念号を発行するに当り大方の関係の皆さんの御寄稿を類はし前例にないク山と博物館々の出来ましたことは本当に有りがたいことであります。

もう10年かと思われるのでありますが、この10年が実に草創の苦しみと喜びとの相錯綜したものでありまして、感慨一入深いものがあります。けれども私共は草創時代が完全に終わったものとは決して思っておりません。一応軌道には乗ったものゝまだまだであります。

日本唯一の山岳博物館と名目だけではなく、内容形態共に充実したものにしたいのであります。文化の根本は学問の尊重にあることは言うまでもありませんし、又文化の一所産である博物館もやはり学問研究の尊重が基となり、一般民衆に学問知識をありありと展示し、百聞は一見にしかずという原理を興味と悦楽とを以て地味にいくものでありましよう。

あらゆる先進国は悉く博物館を尊重しております。その意味におきましてよき博物館を持つということは、あらゆる面におきまして、大町の大なる誇であり、又一郷のみならず国家の幸福と申すことが出来ましよう。

(山岳博物館長・大町市教育長)

# 博物館10周年を迎えて

大町市長 松田正人



市立大町山岳博物館が全国でも稀な山岳博物館として独立施設をもち開館したのは昭和26年で、更に開館後5年を経た昭和31年には長野県御当局の好意により当時の県立大町南高等学校旧校舎の払下げを受け現位置に新館を建設して現在に至りました。こゝに開館10周年を迎えたことは誠に意義深く慶びに堪えない次第であります。

私が今更申上げるまでもなく10年といえは「10年一昔」の諺のごとく、過去の一頁にすぎませんが博物館の今日までの10年間は山岳博物館将来発展の基礎づけの重要な意義ある10年であったわけであります。この間関係各位多大の御協力、御努力によって其の基礎づけが確立されましたことは感謝に堪えないところであります。特に山岳

博物館としての機能を高めるために必要な幾多の資料収集や調査活動については乏しい経費と環境のなかで、非常に御苦心され、その目的達成のため活躍されていることは本当に御苦勞様であります。今や当博物館も県内外よりいよいよその存在価値が認められ、当大町市の「シンボル」となりました。去る4月皇太子殿下の御来館の光栄を始め高松宮御夫妻の御観覧等博物館をおとすれる人々が多くなったことは誠に喜ばしい限りであります。附属動物園の移転については、管理上から又博物館の全体整備計画上からして、博物館園地内への移転を10周年記念事業とし市財政乏しいなかではあるが、これが財源確保とともに1日も早く整備を期したいと考えています。ここに開館10周年を迎えて過去10年の歩みに思いをいたし、更に博物館が将来へ飛躍の踏台となる一節を画することが出来得ますことを信じ、開館10周年を祝福申し上げるとともに関係諸賢の今後一層の御協力を重ねてお願い申し上げます。

## 10周年を迎えた 山岳博物館に寄せて

日本博物館協会長

徳川宗敬

昭和26年11月1日、大町山岳博物館が開館されて以来、はやくも10年の経過を見、この間にこの館独自の活動を展開し、めざましい成果を挙げられたことは、われわれとしてまことに慶賀にたえないところであります。

かえりみますと、この10年は、日本の博物館界にとってもすこぶる重要な意味を味った時期でありました。それは民主社会に芽生えた文化的意欲が博物館施設を拠点として、国民の生活基盤に密着し、明るい豊かな生活を築くため、浄々たる希望にみちた活動時期に至ったといえましょう。

大町山岳博物館は日本の博物館法制定と期を一にしております。市当局がこの出発点において、将来への大計をもって、世界に唯一とあってよい山岳博物館を創設し、多くの協力者の熱情をもって着々と広大な地域の中核調査事業を行ない、また産業開発のため日に月にその形容を変えていく事態に処して早くから自然保護、民俗資料の保存に鋭意力をつくされ、その成果を報告書、館報を通じて大町市市民は勿論のこと、広く一般に報告し、その事業の理解者を得るよう努力されていることは、その慧眼と情熱にあらためて敬意を捧げるものであります。由来、博物館の活動はその効果のわりあいに地味なため、報われることを期待することはなかなかできませんが、博物館を愛する協力者のある限り、われわれは百層倍の勇気を奮るいたたせられるのであります。大町山岳博物館は地理的には大都市の博物館と異なり地域・対象を異にするものでありましようが、博物館の究極の目標においては差違のあるものではありません。

博物館として10年の歩みの最初の一里塚は越えました。文字通り山岳博物館の活動は、足と和の精神でこそ効果を期待できるものであります。博物館を支える足は、市当局、地域の人々、博物館人それぞれの一致の努力において、山岳博物館の発展をおのづから約束されるものがありましよう。登頂の道はけわしく遠いものですが、一步一步着実な前進によって山岳博物館の今後の活動と発展を期待して止みません。

# 10年によせて

長野県知事 西沢権一郎

昭和26年、我が国でも例のない山岳博物館が大町市に産声をあげてここに10年、この11月1日で満10才を数えたのでありますが、戦後文化国家として新発足した日本の現状は自然教育の面では非常に遅れているという感があります。自然物の保護と管理、自然物に対する愛護精神の高揚は狭い我が国の国柄からして絶対に必要なことであります。この自然教育の実践という点にいち早く着目され本県ならではの計画として、その時期と良きところを得てこの施設を実現され、以来幾多の障害を乗り越えてここまで育てあげた大町市並に関係各位の熱意に対し深甚の敬意を表するものであります。申すまでもなく本県は教育県文化県として自負しておりまして、この種の施設は当然考えるべきことであります。また観光県として多くの景勝地に恵まれておりこの観光資源を十二分に活用してその発展を期すべく観光立県を重要な県の施策としてとりあげていることは御承知のとおりであります。北アルプスを対象として自然科学、人文科学等広い分野に亘り資料を集められたこの博物館は観光資源としても重要な役割をもつものであり本県観光事業の恒久的な発展のため寄与すること真に大いなるものがあると思います。国においても中部山岳一帯を国立公園に指定しておりますがその本来の主旨は、自然の景観を保護育成し同時にその開発をはかって国民の保健、休養、教化に資するということであって、特に教化という面は、最も重要視しておりますが、その施策については二次的に考えられ、たち遅れている現状であります。しかしながら本県としては、自然の物象に恵まれており真に好条件にあるといえますので、この点について私共としては他に先立して具体的な対策を早急にたてるべきことを深く感ずるわけでありまして。

設立以来10年を迎えたとは申しますもの末に設備等万全とは申せませんのでその整備拡充は是非必要でありまた後立山連峰を中核とする針ノ木自然園の構想にもとづく野外博物館の建設など多くの懸案事項も一日も早く実現し、大町市の博物館に行けば山岳関係のことは何でも判るという位の全国的な立派なものに育てあげてを心から念願し、今後共にお互に関係各位のたゆまざる努力を期待してやまないものであります。

大町山岳博物館の設立10周年にあたって一言私の感じたままを申し上げ挨拶といたします。

## 針ノ木自然園の事業主体について

羽田健三

創立十周年を迎えた山博は、年ごとに異常ともいえる成長を遂げており、価値高い文化活動を多方面に続け、山岳都市としての大町市の名声を天下にとどろかしていることは、市民一同と共に喜びに堪えない所である

ところで大町山博は、従来の博物館のようにチリに埋れて展示のみを守る消極的な立場になく、登山者と共に山岳の現場に入り、そこで、自然の科学的知識をひろめ自然を愛し、またこれを守りながら真底より自然を楽しむという風潮を積極的に進めるといふ立場を創立以来の館是としてきている。

しかしながら、そのような立場を十二分に果すためには、どうしても野外博物館施設としての、いわゆる針ノ木自然園の実現が欠くべからざる条件になっている。ところが国際的な観光地と化する黒部一帯にマッチして、そのような施設を造ることは、莫大な資金を要するので、地方財政下にある山博が、之を実現することは不可能であると多くの人が多いがこれも無理からぬ話である。したがってこの機会に、針ノ木自然園の構想を実現するため

の事業主体について一私見を述べ、関係各位の御参考に供し、またその実現に絶大なる御協力と御支援を賜りたいと思う。

### 自然管理局

西沢さんが知事になられてからの県政の大ヒットの一つは、すぐれた自然資源を豊かにもつ県下が観光植民地化することを除くために、県がバックアップして各地方を主体とした観光事業を開発しようという県観光開発公社を設けられたことにあり、既に大きな仕事を各地に展開されている。ただむづかしい経済に関する仕事であるため、株の上下ではないが一部に問題が派生しているが県民は長い眼でこの良政を守り育てることが絶体に必要である。

さて、どのような資源でも、無差別に略奪してしまうと、その資源は枯渇してしまう、自然を資源とする観光事業でも同じことであり、現在の時点において、人がいくらか多く利用するからといって、そこの自然に合はぬ建物や乱増したり、その上山者の自然を損う行為を放





置しておいては、観光資源が荒廃したことになる。自然が俗化してくると一度訪れた人は二度と来ないことになるので、利用者が激減する日が必ずやってくる。したがって観光事業を日々隆昌ならしめて永続させるためには、自然の管理と保護の事業を欠くわけには行かない。すなわち観光事業は自然の保護と利用の調和に絶えず気を配らねばならないのである。

厚生省には既に自然保護委員会があり、国立公園地帯に観光事業や電源開発事業がおこされるばあいには、自然の保護に万全の策を進めさせている。ただ既設の観光地をみると、その現場に自然保護のための施設や要員が貧しく、また全然それらの存在しない処が多く、現場の自然はみなひどく荒廃していることは御承知の通りである。県の観光開発公社の事業はすべてこれからのものであるが、黒部ルートのはあいは、虚心に山博の針ノ木自然園の構想をとり上げられ、自然の保護をバックボーンとして進められているが、そのような文化意欲の全くみられない富山県側と比べたばあいは、文化県、教育県としてほこり高い長野県にして始めて行いうる良政であり県民のために慶賀に堪えない次第である。ただ県の観光開発公社は県下各地に同類の観光事業を指導される立場にあるので、厚生省の自然保護委員会のようなものを設置したり、また各地の現場に、大町地区での山博のようなものを設けることが望まれるし、更に県庁内には、これらを体系化した自然管理局というようなものを観光課と表裏一体的に併置されることが望まれる。

#### 自然園の事業主体

大町山博ではただ今館をあげて、雷鳥・サル・カモシカの生活史の調査に余念がないが、これらの生活史の全貌を明らかにした上は、それらを餌付かせて増殖し、自然の現地の人に馴致させることを目標にしている。なぜならば、自然園の開園と共に山博が館務として常設する山の自然教室を進めるばあいの欠くべからざる重要な生物教材であることによって。ところで観光事業の面からこれを見るならば、それらの動物たちをみるために入山する人々も多大に上るので、新たに観光資源を開発したことになってくる。また山博がたとえばカモシカを密猟するような自然を直接荒す不心得者を取りまったり、更に山の自然教室によって自然愛を根本的に奮起しあき缶やかみくずを自ら処理するような山の道徳を守る運動を進めることは、自然資源の荒廃を防ぐことになる

ので、これまた観光事業者が本来自らすべき仕事を、分担してやってやることになる。このように考えてくると、そこに観光事業を進める当事者たちの利益の拡大のために山博は目に見えない仕事を進める役廻りであり観光事業と表裏一体的な施設であるといえることができる。ところで自然公園法には、国立公園下に事業を進めるばあいは、その利益金の何パーセントかを自然修復費として提供すべき義務を負わせている。この自然修復費は拡大解釈するならば自然保護費であり、山博施設を造り、その活動を進める費用といえることができる。

したがってこれらを合せ考えると、針ノ木自然園の事業は、交通事業者や宿泊事業者などの観光業者と山博とが表裏一体的に密接に連絡をとって進める事業であり、山博の必要とする施設費と維持運営費は、誰がそこに観光事業を許されようと、それらの事業者が分にに応じて分担して負わねばならないことになってくる。

ただ分館や路傍展示板などは、観光に開放された隣において、数ヶ月で完成することができるが、雷鳥その他の動物を観光資源としてまでに高める仕事は性質を異にしており、ただ今より数ヶ年を要して始めて成せる大変な仕事である。したがって山博では、人員と予算のない現状下にもかかわらず、ただ今幾多の困難にもめげずに仕事を始めているのである。しかしながら雄大豪壮のアルプスの山頂において、しかも猛吹雪やナダレや落石を伴う厳冬期にも多大の危険をかくごで仕事をつづけねばならないこの大事業は、現在の山博ひとりのわずかな人員と予算の下に、不完全きわまる装具によってはとだいに無理である。したがって県当局におかれては、県の観光開発公社が、針ノ木自然園の全体計画の一部としてこれらを取り上げられ、公社独自の仕事としてわれわれに委託されるようになることを強く望む次第である。

以上を要約してみるならば、山博施設を含めた針ノ木自然園の事業主体は、いぜんとして県の観光開発公社の指導下にある大町市にあり、ただ山博の施設費・維持費運営費の一際はそのことに入ることを事業主体に委託された観光事業者が分担して負わねばならないということになってくる。ここに一私案を述べたのであるが特に県当局や公社に対して失礼の点も多々あると思われるが意のある所だけをくみとって頂きたい。またこの私案に対する関係各位の御批判と御支援を切にねがい上げる次第である。(山博囑託・信大助教授)

# 博物館に望むこと

古賀忠道

大町山岳博物館が誕生してから、もう10年になること、同博物館は、若い学芸員諸君の熱心な努力で、誠に失礼ながら、とほしい予算の下に、日本でも非常に特徴のある立派な博物館ができたことは、誠に御同慶の至りに存じます。

大町は日本の代表的山岳地帯、いわゆる日本アルプスのふもとにあり、何としてもこの山岳を中心とした博物館施設が欲しい所だったので。ことに日本アルプスは吾が国でも有名な登山地帯であり、また観光地ともなっているので、この博物館を中心とした、山岳に関する各種の資料の収集展示により、山に関する知識を普及すると共に、この博物館が中心となって、これに関する調査研究を行なうことは、この地方でなければできない、最も大切な仕事の一つであると言えましょう。

本年9月新潟で開催された第8回博物館大会に於いて東京国立博物館の野間清六氏は、博物館がその地方の文化のセンターであるためには、むしろそれがレクリエーションの場であることを主とすべきであり、そのためには、動物園を見ならうべきだとの説を強調されました。私も実は、昭和34年の長崎における同大会において、野間氏ほどではありませんが、従来の博物館が如何にも魅力に欠くし、それが博物館の不振の原因ではないかという主旨を強調し、その間に、私が直接関係している動物園に例を取って種々論じました。つまり、このような意味で、私は野間氏の御意見に相当同感を禁じ得なかった訳です。

博物館はその当事者自身の努力が必要ではありますが、更にまた、一般民衆の協力、特に博物館に対して大いに興味を持ってもらうことが、その博物館が発展するかどうかの大きい分岐点になるものと考えます。

大町山岳博物館で最も力を入れて収集展示研究をされているものは、この地方の山岳の動植物だと思います。そして近代の自然史博物館としては、その生態陳列に最も力が入っていますが、これは博物館の中でも、最も魅力のある部分で、世界各国において実施されている展示方法です。ここでは、私たちがその動物のいる地方に行った時と同じ景色が展開されていますが、実際は、ほんとうにその動物の生息地に行った時よりも更に美しい景観だと言った方がよいのです。よく「絵のようだ」と申しますが、動物の剥製を前に配置し、完全にその生息地帯の地形、鉱物、植物を模した細工と一番奥の壁画とは、

照明のうまさによって、「絵よりも美しく」ほんとうに見ていて楽しくなるのです。私はこのようなことが、野間氏の言われる、日本の博物館に欲しい諸外国の実態だと思いません。

実は動物園においても、その展示法が、近代になって生態的となり、動物地理学的展示が盛になりました。私は生態学的展示の理想は、動物の分布、つまりFaunaと、植物の分布Floraとが一致したものだと思います。しかし動物園で一般に行なわれている、例えばアフリカ生態園などは、動物そのものは持ってこれますが、植物は1年中日本の気候で栽培することが不可能のため、真にFaunaとFloraを一致させることは不可能ですが、日本における日本生態園の設置は、その理想通りのものが可能なのです。

大町山岳博物館では、最近特に、日本の代表的動物であるカモシカの飼育、研究を実施されているようですがこのことは大変良いことだと思っています。私は従来、上野動物園においても、どうしてもカモシカを飼育展示することが、東京にある動物園としては、国家的義務であると信じて特に戦後大いに努力いたしました。しかし東京においては、いまだに成功いたしておりません。しかし私は、世界的に有名なカモシカが、日本のどこかで必ず見れる状態にしておくことは、是非必要だと考えています。そしてこの仕事を、最も地域的に適した大町の博物館でやって頂き度いものだと考えます。

私は先程、博物館がもっと大衆の興味をひくことが大切であると申しましたが、何と言っても動く動物の存在は、一般の興味を集めるのに、大変役立ちます。動植物の博物館における陳列は、剥製等で行なわれていますが、もちろん、それが生きたので可能であれば、それに越したことはありません。私は大町山岳博物館が、その立地条件をフルに利用して、真にこの地方の動植物の収集によって、カモシカを中心とした生きた動植物の生態展示が行なわれることを希望いたします。

このことは、大町山岳博物館を非常に特徴付け、同時にまた、それが民衆による利用の増大をはかり、従ってその教育的効果を向上する最良の方法であると信ずるからであります。

(上野動物園長)

# 10周年を迎えて

福岡孝行

敗戦の混乱のしづまりかけたある日私は大町を代表する助役宮崎、古川、伊藤、伊東、石原の諸氏の一行の訪問を受け、新たに発足する山岳博物館の館長になるよう求められた。館長という要職は非力な私の柄ではないし、他の事情もあって御辞退申し上げねばならなかったが、役柄、肩書はとも角として私に出来る限りのことは致しましょうというので顧問ということにして頂いて今日に及んでいる。

外面的には戦災をうけなかった大町は、戦災を受けた他所の町のように先づ住む家を、食べる食料をそして身につける衣料をという心配をしないで済んだ。大町は戦争の破壊のどん底から立ち上る必要はなかった。

戦後の文化に対する渴望は長く断たれていただけに強く激しいもので山間の寒村にまで見られた現象であった大町ほどの規模の町はわが国には殆んど無数にあるといわれてよい。その大町はその文化に対する意志を山岳博物館に結集し、そしてわが国のたった一つの貴重な存在とすることに成功した。これは文化に対する意志のほかに大町が山の町としてその背に担って来た山の町、山と人間とを結びつける拠点としての伝統、自分たちの山を身近かに持っているという親しみの一独占欲ではなく一こもった自負一自負で悪ければ一ほこり、そしてききにのべた戦禍を受けなかったという幸運等々の複合した結果であろう。

私が大町の意図に共感し共鳴したのは、戦後に潮のようにおしよせた文化への渴望の中にはこの種の流れの常として、文化という名に値しない、ただその言葉のみを口に称えてもて遊ぶだけの文化コンロ、文化釜といった類いの真の文化とは余りにも縁遠い似非文化が横行する

中であって、大町の山岳博物館のそれは全く趣を異にした真の文化にふさわしい内容を持つものであったからである。

文化とは英語、フランス語(Culture)、ドイツ語(Kultur)では「耕す」という意味の語で、カルティヴェーター(耕耘機)にそのなまのはたらきが見られるように、自然に手を加え人間のものとするはたらきであり、また手入れをするという意味をも含んでいる。大町の山岳博物館をつくるまでの活動はまさにこの文化活動であり、その成果は文化財そのものと言いうるからである。

顧問になった当初私の同僚の一人は言った。大町というのは、たしかに大きな町と書けけれど、一体全体人口はどの位で、どんな町なのかと。私の答えるいろいろの数字に意外な面持ちをして彼は言った、よほど物の分った人の多い町なんですね、そんなに小さい町なのにと。以来これと同じ質問には何回接したか分らないが、その度に私はほこりを以て答え、説明するのであった。羽田先生のユニークな(かけがえのない一天一品の)存在も若い人々の熱意も必ず話題にのぼるのが常であった。

当時たしかに若い人々の熱意が主動をもち、またこれらの人々に火を灯した存在も忘れてはならないが、これらの若い人々の切なる願いに耳を傾むけ、実現する方途を開き、力を寄せた人々—元老的存在に欠けていたならば今日山岳博物館はありえなかったであろう。純粹なひたむきな願いはただ若人の中で若き日の見果てぬ夢にとどまり残念な想い出に生きたにちがいない。このような意味で若い人々も年長年配の人々も、つまりは大町全体が幸いをつかんだといえるのである。そのどの一つが欠けても事は成就しなかったに違いないし、私がこうして「10周年を迎えて」いろ

いろと想いめぐらしながら拙い筆をとるなどということもなかったであろう。「幸い」をつかんだと私は言ったが、今日もし新たに設立するとしたらどうかを考えれば「幸い」が決して行き過ぎた表現でないことが誰にもわかるであろうしまたもしわれわれの博物館がなかったら、と過ぎた10年をかえりみれば、その存在の意義がその重さがかえ



って明らかになるであろう。そして大町はこのわが国にたった一つという「ムサイ」の殿堂を持ち、またほこりえなかつたであろう。

信州ことばで「ムサイ」とは「きたない」ということであるが私がこゝに「ムサイ」というのは信州の「むさい」とはおよそ逆のものである。

そもそも博物館とは英語のミュージアム、ドイツ語のムゼウム(Museum)の訳語であってギリシヤ神話のミューズの神々の座である

「ムサイ」はこのミューズのギリシヤ名であって、「むさい」ではなく「美しいもの」を司るゼウス(ジュピター)の9人の娘、つまり女神たちである。

ギリシヤ神話の最高神ゼウスとムネモシユネという記憶を司るものとの間にできた9人の娘、ムサイたちは、

グレイオー—有名な者—歴史

エウラルペー—喜ばす者—器楽

タレイアー—美しき者—喜劇

メルポメネー—歌う者—悲劇

テルプシコーレー—踊を好む者—舞踊

エラート—愛らしき者—恋愛詩

ポリュムニア—荘重な歌をうたう者—讃歌、雄弁

ウラニア—天上の者—星学、天文学—学問

カルリオペー—美声の者—叙事詩

である。この9人の女神が、最高神と記憶を司るムネモシユネとの間にできたという因縁、宿命、そして上記の事柄を司り象徴するというを、古代ギリシア人が心に抱いたことを投影し理想化した事柄を、静かに深く内に省みれば、今こゝに10年という年令に達したわが大町山岳博物館がこの10年間に、なすとげたこと、なすべくしてなさなかつたこと、そしてなすべきことが自から明らかになっていると思う。

博物館の使命とするところは、東西、古今—空間的に時間的に自然と人間のつくり出したものを蒐集し、保存し



展覧しまた研究するところであって、近代になっては研究と一般教育にますます重きがおかれるようになったことは御承知の通りだが、かりに「山岳の」と限定してもその仕事が広範にたわり、多岐であることは「ムサイ」の女神ならぬ館の関係者の百も承知のところであろう。が、自然のみで人間を無視することはできないし、この逆もまた成り立たない。自然と人間との、そして両者の接触、関係においてつくりなされる事物現象を人間に分ち興え国民のそしてひろく人間の保健と休養と教化の拠点として奉仕するという使命は、機械化、工業化、都市集中化の中で、自然との接触を失い勝ちな日常生活(仕事と休養)の中で、重きを加えるというどころか、不可欠のものとなっている。ムサイの女神がすでに暗示するように、わが博物館は、忘れてはならない大切なことから分ち伝え、喜ばせ、愛されるものでなければならないこの大使命は館に直接間接関係ないとは言えない大町全市の努力と山岳に関心を抱くすべての人々の有形無形の協力によってのみ実現され、さらに大きな輝かしい拠点となりうるのである。特に大町の市政にあづかる者にはその育成の大きな責任があるのである。それは日本の存後をなす山々にかこまれた大町の一大町以外にはない—宿命であろう。(山岳博物館顧問)



# 山博10周年を迎えて

沼田 真

「山と博物館」の最近号に羽田健三氏が語っているのをよむと、外部のわれわれの気づかないところで、山博発展のための苦労が重ねられていることがよくわかる。博物館の経営ということに関しては、今日一つの重大な転機にきているようである。

しかし、そのような内部事情とはべつに、この山博はたんに大町市の山博であるにとどまらず、日本の山博として強力な地歩をかためつつある。これはお世辞ぬきにそういえると思う。博物館の設備や展示物など、その静的な内容も山岳を中心として極めて特色がある。しかしこれだけならば、とくにとりたてるほどのことはないかもしれない。それよりも過去10年にわたって行なわれてきた、山岳の自然を調査検討し資料を蒐集するための活発な野外での活動、この動的な内容こそは大町山博の評価に盤石の重味を与えているものである。

その一部の成果は、先に「針ノ木岳—自然とその保護」(1959)にまとめられ、また日頃の活動は「山と博物館」誌上に折々の動向が伝えられている。展示物や出版物はもちろん形にあらわれた博物館活動であるが、じつはその背後にある、足をつかっただけの活動に最大の注目を払いたい。一つの市の博物館で、少ない若い館員で、山岳を中心として、これだけの活動をやってきたことは驚嘆に値する。これは若い人達の努力もさることながら、黒幕たる羽田健三氏の超人的活動に負うところが大きいことは知る人ぞ知るである。私は同学のよしみで、羽田氏とは古くから親しく、誘導弾を遠隔操作するようなその怪腕を楽しく拝見してきた。彼の野外観察の目の鋭どさたし、粘りづよさ、また若い連中に対するボスの活動は無類のもので、「山と博物館」の最近号に彼自らザンゲしているところにもその一端がうかがわれる。彼のこの長年の活動の一部は、最近学位論文としてまとめられたが、その基礎となった膨大な資料には私も一驚したものである。

ところで山博の今日の活動の最大目標は「針ノ木岳」によくしめされているように、おそらく針ノ木自然園の建設にあるであろう。自然園という概念はわが国では十分に通用していないが、野外博物館として、自然の研究観察の場として、施設としての山博の基盤となるべきものである。博物館の施設とそのフィールドとしての自然園の有機的な関連がなりたつてはじめて、山博はそうした新しいシステムのかなめとしての役割を果たすことができる。目黒にある文部省の自然教育園は英名をNational park for Education とよぶそうであるが、針ノ木自然園はまさしくそのようなものである。いわゆる

自然公園の特別保護地区そのものではなく、保護をはかりつつも野外博物館としての、とくに教育的(あるいは研究的)役割を果たさせるための観察施設をもうけることになろう。わが国ではそのような既成の例がないだけに、まだかなりのPRを必要とするであろうが、すでに自然公園として指定されている地域内での利用管理の一形態として大いに注目しているところである。

一方、このような新しい自然教育(研究)施設とからんで若干の苦言を呈するならば、私どもの見るところ、館員があまりにも多忙だということである。それも館員としての素養を高めるために多忙ならよいのであるが、あまりにも事務的なことや社会教育的活動に追われすぎているのではなからうか。もちろん市の博物館として地域的な要望もあるのであろうが、博物館は公民館ではないし、何といても館員の博物学的実力をつけることが第一である。そのためには、(1)まず人の問題であるが、博物館の事務・普及系と研究・教育系の仕事をはっきりわけ(そのためには定員が少なすぎる)、館長には責任のしっかりした人材(視野が広く、とくに研究面に十分の理解を有する人)をおくこと。今問題になっている動物園移転についても、これを扱う人がそばにいて愛情をもって接してはじめてりっぱな管理ができるのであってせひとも本館の付属施設として移転し、館の有機的活動のなかに加えたいものである。(2)館員の実力向上のため館内においては研修日をも受け、研究のための各自の外業を許し、かつ大学などへの内地留学(最少限半年)を実現すること。(3)館員の研究活動は紀要の形で、少なくとも年一回の「年報」として発表することなどが必要である。この苦言は館員に対してというよりむしろ市当局の方々に申しあげた方がいいのであろうが、内政干渉とみて甚だ気がとがめる。しかし少なくともこの程度のことを実行しないことには、これからの大町山博はのびないと断言できる。今までは曲りなりにも、無理をして頑張ってきたと思うが、無理がそんなにきくものではない天下の大町山博として期待がもたれているのに、現在の機構ではその期待にこたええないことをうれうるのである。

外部のものが何を余計なことをいうかといわれればそれまでであるが、幸い市には理解のある方々も多いようであるから、せひとも後押しをして山博の大成をさせて頂きたい。これが私のいつわらぬ表情である。とんだ挨拶となって恐縮であるが、感想を求められるままにあえて一筆した。(大町山岳博物館顧問・千葉大学助教授)

# 10周年を迎えた山博に寄せて

田村 剛

大町山岳博物館は、わが国では唯一の存在である。国立公園内にも博物館はあるが、山岳・登山を主題とするものではない。海外にはサンモリッツやシャモニー等にも山岳博物館はあり、いずれも大した規模のものでもない。大町のもは決してひけをとらないと思う。然るに、本格的な容れものが、もっと立派なものになってほしい。しかし、その内容の方から云えば、立派なものだ。殊に博物館の運営に当られる役職員が、熱心で互に協力され、全く献身的に活動しておられることには大きな誇りである。月刊の「山と博物館」はすばらしいと思う。私なども、多くの刊行物を手にするのだが、大部分は読みすてしにしている。ところが「山と博物館」は保存する部類に入っている。そのほか臨時の刊行物とか登山講習会とか、ほかでまねの出来ないようなものを続々遂行され、社会に大きな貢献をしておられる。大町市が全国に誇りうるもの最たるものであると、私は信じている。

ここに10周年を迎えられて、回顧すれば、万感こもごもであろうと思うが、時としてはその存在を根底からひっくり返されるようなこともあったであろう。しかし、私は大町市当局や市民の良識が、あくまで存続を期せられたことに敬意を表する次第です。さきに雷鳥の徹底的調査に乗り出されたことを承知して、これは実に大賛成です。博物館は単に館内に立て籠っているのでは意味がない。最近ユネスコの「クローリエ」誌を読むと、国際自然保護連盟(IUCN)の主催するアフリカ猛獣保護運動の状況を報道していて、これにはニューヨーク動物園なども乗り出して調査に活躍し、また資金面でも協力しているようだが、博物館の活動は野外に手を伸ばさなくてはならない。特に生物に関する限りは、館内の陳列よりも、野外に於ける生態観察の方が重要である。

先日アメリカの生態学者が来訪し、広く日本の国立公園を見て歩いたあとで、「阿寒湖畔に博物館を造る計画があるようだが、それよりも公園の利用者に対して、科学的なガイド・サービスを実施することの方が、有効であり、経費もかからない。国立公園は全域の自然がそのままに博物館ではないか」と、云っていた。また「バス・ガイドの説明にも、景観の科学的な解説がたりない」と非難していた。これはたしかに傾聴に値すると思う。

大町市は実に日本アルプスの中樞であり、登山のメッカである。博物館を充実することは、もとより重要だが野外活動を強化することには、一層意義がある。かつて大町から黒部の入口にあたる山地に、自然動物園を設立する考案もあったようで、その着想は大変よいと思った出来れば相当面積を画して、嚴重な野性動物保護区を設定して、観光客や登山者が、その生態を観察出来るよう

にしたらどんなによいことであろう。

由来日本の国土では、野生動物が年々減少している現状である。アフリカやカナダでは野性動物の保護だけの目的で、設立されている国立公園があり、アフリカでは入園料を徴集しているがその収入は公園管理費の大半を償っているし、ひいては野生動物の見物を唯一の看板にする観光事業が国のあらゆる産業のうちで2・3位を占めるといったようなことも、聴かされるのである。

日本の気候や地形や植生は世界に類を見ないほどに変化があつて美しいのであるが、野生動物の見られないのが、淋しいとは、外人が口をそろえて指摘するところである。殊に近頃は鳥類や昆虫類が農薬の使用によって、著るしく減少して、日本の景観を損じていることは著るしく、これは自然保護と産業との調整に困難な問題の一つであつて、国際的な問題となっている。

このほど国立科学博物館では、自然保護の部門を新設されることとなつたが、恐らくこの部門の活動は、地方に自然保護区を設置して、その生態学的調査研究を行なうと共に、大衆に自然観察の手引きをするといったようなところまでの発展が大いに予期されるのである。私は大町の山岳博物館のような施設が、その中央の活動と提携して、地についた業績をあげられるようになることが好ましいと思つている。

海外では、大学の教室や博物関係の財団が、それぞれに立派な博物館を経営して、大衆に対する自然保護教育に貢献しているが、何と云つても金不足を訴えている日本の教育界では、そうしたことはなかなか急速には望まれない。しかし、だんだんにはそうした恵まれた状態に接近するにしたいものである。現在でも鳥類に関連しては、日本鳥類保護連盟や日本野鳥の会があり、猿類については日本モンキー・センターがあり、それぞれ国際的にもその存在を認められるほどの業績を挙げている。そして更に望みたいことは、要は野生動物が単に狩猟の対象として一部の人士により、捕獲され、殺されているのは、遺憾なことである。狩猟法を改正して鳥獣保護法の名にふさわしいものとしなければならぬと思われるのであるが、そうした要請が国民の声となつて来なくては、その実現はむづかしい。それにつけても博物館施設の社会教育的活動が最も効果のあることは、もちろんである動物に限らず、自然愛護や保護に関する知識を普及することは、日本文化を世界的水準に高めるために必須の条件であつて、私は山岳博物館の画期的発展を切望して止まない、ここに10周年を迎えられたことにつき、その過去の栄誉ある功績をたたえと共に、今後の大発展を祈念するものであります。(国立公園協会副会長)

早いもので、大町山岳博物館が誕生してからもう満十年になる。東京からの身にはオーバーを着ていても寒い程の霜月に、当時の社会教育施設担当官川崎繁氏と大町山岳博物館(旧館)の庭にたつたことが昨日のこのように思い出される。奇しくもまた博物館法自体の発足が同じ1951年である。つまり大町山岳博物館の歩みはそのままだ博物館法の歩みでもある訳である。多分こんな意味で、「全国博物館活動の10年」という拙稿の要求が舞い込んできたのであろう。

さて振り帰ってみると、終戦直後231館しかなかった博物館から、すくなくとも600館以上になった今日までの博物館の歩みは、とやかくは言われながらも、一応たいしたものだと言えよう。もちろん数だけで云々する積りは毛頭なく名実ともに伸展したことの一例として数をあげたまでのことである。利用者も、当時どのくらい利用しているか実態すらわからなかったものが、現在ではすくなくとも全国民2人に1人の割合で毎年博物館を利用しているし、最近では年に20~30館の割合で新設博物館が増えている。やっぱり順調に伸びているとみるべきであろう。

さて、これをもうすこし詳しくみると、戦后16年間の博物館の歩みに、一つの大きな転機があったことが解る。つまり1951年を境として後半がすべてについて急カーブに上昇している。この理由は何といても博物館法の施行による博物館の社会教育における位置づけがはっきりしたためであろう。1945年から1951年までには約140館増えているが、その相当数は戦前戦中であって一時閉鎖されたものの復活や、趣旨を更新して再出発したものなどが含まれ、1951年から1960年の間に増加した250館近くのものの大部分が新設であるものと対比してもその特徴がわかる。しかし何といても最近十年の博物館活動の出発点は博物館法により、博物館の概念が明確に示され、特に生きた資料を扱う動植物園、水族館が含まれるようになったこと、専門職員として学芸員の身分制度が確立したこと、国による補助金(施設費・運営費の双方について)交付の道が開けたこと、各種の税法上の特典が与えられるようになったこと等の運営上の本質的な体質改善であろう。

従って最近十年間の内訳を論ずる前に、この十年間がその前の何十年間とは際だって目立つ優れた存在であることを先ず強調しなければならない。

さて、法的措置による博物館の道は開けたといってもこれを歩むことは実際問題としては容易ではない。第一に博物館法による博物館が決して全博物館を等価的に扱

っても包含してもいないことである。登録博物館および博物館相当施設全部を併せても現在ですら約300館程度で日本の全博物館の二分の一に満たない。そして、当初は教育委員会と文部省系統が重視されていたあまり、他の地方公共団体主管が大部分である動植物園・水族館等は実質上拒否されているという事態すらあった。第1回および第2回全国博物館大会あたりの議論は専らこの辺に集中されていた。学芸員にしても、当初3ヶ年間学芸員の資格附与のための講習会が文部省主催で実施されたも

の、学芸員となり得る資格を有するという資格で、直ちに学芸員に任命されるという事ではない点十分に伝わらず、かつは法文に忠実な地方公共団体では逆に学芸員という職種をつくらず、これも有名無実の感があった。また補助金にしても公営で教育委員会所属のいわゆる登録博物館だけに限られ、他の地方公共団体や私立のものに対しては何等の措置もとられなかったしかもその登録博物館は現在ですら100館に満たず、相当施設の二分の一以下という逆現象を呈している。かつ、補助額も対象館の全予算のうち該当する項目のものだけについての四分の一以内ということで、実際上は年額数千円という補助金を貰っていたところすらある有様であった。

このような事が、博物館全体を打って一丸とする強力な博物館事業への発展を可能とする目標はかけながら実際には思いの他遅々として進まなかった基因となっている。

しかし、全体としてみれば、やはり漸進的ではあるにしても、博物館の位置は高まりつつあったことも否めない。例えば現在12大学で博物館学講座乃至は講義を実施しているが、これなど、諸外国に例をみない現象であり、今後の学芸員の一般水準の向上を約束するものでもある。また日本博物館協会でも従来の官僚的事業実施の枠からぬけ出し、全国を組織化し、地方ブロック単位の会員本位の運営に切換えようと努力している。一方1960年にアジア・太平洋地域博物館セミナーが東京で開催されたし、この前後から博物館の国際交流も目立って進んで来た。この8月以降でも新井・青木・筒井・羽根田の諸氏が欧米各国に向出されているし、東京国立博物館では第2回ループル展を実施しているくらいでもある。

要はこの10年間で日本の博物館の歩むべき荒筋は確立した。次の10年はこの肉付けと検討の上に立つ整然たる本筋を求める時期であると思う。

(国立自然教育園次長)

## 全国博物館活動の10年

鶴田総一郎

# 10年のあゆみ

## 開館

突貫工事で進められた博物館施設への改築工事は10月31日もお続けられていた。公民館からの資料の移転をはじめ、展示作業、それに動物舎の整備と、開館を翌朝にひかえて作業は山積していた。しかし、博物館委員をはじめ各関係者、そして南北両高校生の応援もあって、11月1日の空が白くなる頃には、ようやく開館作業も終りに近づいていった。屋外の炊火のまわりに集る多くの顔は、創りだした喜びと、明日からの希望にほてって赤かった。

福岡氏の筆になる沿革の序文は展示室の入口に掲げられた。博物館は遂に開いたのである。

——終戦後の混乱に世をあげてまきこまれているときに当町の青年たちは強く文化を求めはじめた。公民館の青年部に芽ぐんだこの文化意志は、ついに博物館の設立へと結集され、昭和24年構想を終って資料の収集に研究に奉仕的な活動が続けられた。またこの熱意のひきおこした連鎖反応は町民の積極的援助となって、大町は博物館建設に一貫となった。昭和26年11月1日、文化の日に先だてて当館はついに開館の運びとなった——

昭和26年11月1日午前10時、博物館前庭において開館式が開かれた。地元関係者、来賓をふくめて参集者は200余名松田町長のあいさつのおと、下川公民館長の経過報告があり、羽田健三氏その他協力者に対する感謝状の贈呈が行なわれた。長野県知事、文部事務官内田英二、国立科学博物館安藤勝太郎、山岳家塚本閑治その他来賓の祝辞があって記念撮影ののち、正后盛会裡に閉会した。

北アルプスの連山が新雪に輝いて、ほほえみを投げかけていた。——大町山岳博物館建設記録(1957, 7, 20)より——

## 昭和26年度

- 1, 昭和26年11月1日、町立大町山岳博物館が開館した。人口わずか17,000人の山奥の小さな町に博物館を生み出した青年たちの努力と町政関係者の英知は、町内外の注目を集めた。設立準備期に引き続いて何れも十代の平林国男、中村武久、丸山晃の三氏が勤務し、嘱託の羽田健三氏を中心に開拓的な活動をおし進めた。この活動を内外から支えたものは、設立準備期以来結束して資料収集に当たって来た若人のグループや、多くの関係者であった。
- 2, 昭和26年12月1日、博物館法が公布され、全国的にもようやく、博物館活動の気運が高まりつゝあった。

## 昭和27年度

- 1, 中村、丸山らが学窓を去った後、4月1日平林昭一郎・5月13日林けさみの二名の職員を迎え、庶務・会計の体制を整える一方、羽田嘱託らは長野県下の水禽類調査をはじめ、各種分野の調査・収集に当たった。又嘱託員として、収集調査に多大の活動をされた方は下記の諸氏であった。荒井昇一(気象)平林照雄(地学)青木治(民俗)長沢欽平(歴史)・丸山彰(山岳)西山雄太郎(山岳)福島覚(山岳)伊藤繁(山岳)細野淳(動物)
- 2, 9月15日、平林国男は学窓を去って辞任し、常勤職員は2名となった。このため大町南高校生物部の石井徳夫、長崎昭三郎・高橋秀男・矢口元次の4名が28年3月末まで学業の余暇をさいて動物飼育の任に当たった。
- 3, 毎日世界ニュースが本館の施設を撮影(5月29日)、NHKが創設期の苦心談を全国放送(6月23日)するなど、山岳博物館活動が全国的に報道されるようになった。
- 4, 昭和27年9月2日、博物館法に基き長野県教育委員会において本館の登録認可がなされた。12月23日には、はじめて国庫補助金(設備費補助)213,000円が決定した。又館庭のパーゴラガーデン新設に対し県支出金170,000円が交付された。



開館の町長あいさつ





## 昭和28年度

- 1, 4月1日, 矢口元次, 高橋秀男の2名を館員として迎え, 組織の充実をはかり, 活潑な普及活動を開始した。7月5日, 博物館創設以来の関係者は互の研修と後続の育成のために, 「博物館研究会」を発足させた。10年後の文化運動を支えるような若い芽を育てることが目標とされた。研究会の指導には本館嘱託員が当たったほか, 下記の諸氏が会の中核として活躍した。福島融(動物) 宮田嘉文(山岳) 仁科甫啓(気象) 大須賀元(地学) 曾根原有致(歴史) 降旗良平(展示) 伊藤昌次(気象) 太田昌秀(地質) 長沢武(動物), 太田浩一・海川庄一・平林国男(以上幹事)
- 2, 駅前ロックガーデンを本館の裏庭に移し(4月12日), 館内壁面の改装(6月21日)を行ない, 附属植物園の樹木ヘラベルかけ(9月~10月) 山岳開拓者の



遺品収集, 古代スキー模型製作などを行なって, 内外施設資料の充実をはかった。

## 29年度研究会々員

所属学校別	会員数
大町小学校	43
大町中学校	40
大町南高校	67
大町北高校	22
南小谷中学校	16
南小谷小学校	31
常盤中学校	55
北城中学校	17
神城中学校	47
深志高校	1
美麻小学校	1
北安農高校	1
松商学園	1
教員	4
一般	26
計	375
所属部門別	人員
植物部	57
動物部	102
歴史部	57
山岳部	45
気象部	19
地学部	32
(生物)	63
計	375

## 昭和29年度

- 1, 大町市内, 並びに北安曇郡下の小, 中, 高校生ならびに一般人をもって構成された山岳博物館研究会は会員375名にふくれ上り, 年間22回の集会活動と月刊機関紙「大町山岳博物館研究会報」は博物館より76,000円の助成を得て順調に盛り上げられていった。新たに寺島虎男氏が指導陣に加わり, 降旗良平・平林和雄らは内山慎三氏の指導の下に会報の編集に献身的な活躍を続けた。
- 2, 昭和29年7月1日, 一町三ヶ村が合併し, 大町市制が施行された。市制施行にともない市立大町山岳博物館条例(条例第18号), 山岳博物館協議会規定(山博規定第1号)が施行となり, 7月4日には山岳博物館規定(教委規則第9号)が可決された。(31・4・1施行)
- 3, 8月2月から30日まで1ヶ月にわたって, 上野に於いて, 文部省による学芸員講習が行なわれた。本館からは五名の関係者が受講し, 博物館の理論と実際について学んだ。又, 12月11日には長野県博物館大会が松本において持たれ, 県内博物館の交流がはかられた。
- 4, 羽田嘱託をはじめ, 平林照雄, 青木治, 細野淳, 中村武久などの各氏による本館の研究報告は次々と発行され, 29年度末までに28編を数えた。研究に指導に超人的な活躍振りを示していた本館嘱託員細野淳氏は不幸にも30年3月2日脳出血のため亡くなられた(享年49才)

## 昭和30年度

- 1, 昭和30年度予算は市政施行以来はじめての予算として注目されていたが山岳博物館は未だ全体的な理解を得られず, 特別事業費としては事務室拡張工事費が認められた程度であり, 全国的に注目され始めて来た博物館研究会に対しても, 5万円の育成費が盛られただけであった。懸案の山岳資





料収集についても予算は皆無であり、唯日本山岳会入会費だけが計上されるという憂慮すべき状態であった。

2, こうした中にも関係者のためまぬ努力は続けられていた。博物館研究会は戸隠めぐり自然観察会(6月5日), 第二回八方山研究登山(7月31日・8月1日), 星を見る会(8月10日) 岩石採集会(8月28日) 動植物採集会(3回), スキー会(2月4日), 兎狩り(3月16日)などを行ない市民との結びつきにつとめた。

3, 8月1日, 建設準備期以来一貫して指導的役割りを果たして来た内山慎三氏を囑託として迎え, 意欲的な活動がはかられた。全国山岳団体との結びつきをはかるため, 山岳団体バッヂの収集, 機関紙・会報の受贈などがはじめられた。

4, 31年の2月2日, 未だ雪深い南安曇郡稲核村の農家の裏庭に出て来たカモシカの仔が保護され, 当日本館動物園に入園。当時生

後9ヶ月ぐらいの幼体だった。その後このカモシカはク岳子と命名され, 市民や大町を訪れる人々に親しまれて来た

5, 2月11日, 動物記録映画「アルプスの驚異」(後に「白い山脈」と改める)製作について富士映画社今村貞雄氏よ

昭和29年度「博物館研究会」の事業

事業名称	施行月日	曜	天候	場 所	指 導 者	参加人員	経 費
春季総会	5月15日	土	晴	大町市公民館	研究会運営委員会	158	無料
仏崎鉱物採集会	5月23日	日	晴	常盤宇仏崎	田中邦雄	34	
初夏の動植物採集会	5月30日	日	曇	平字黒沢	細野淳	62	交通費
神社・仏閣見学会	"	"	"	南安中宣・穂高	長沢欽平	4	"
気象研究会	"	"	"	博物館事務室	仁科甫啓	7	
動物採集会	7月18日	日	曇	北城村細野	細野淳	15	
八方山研究登山	7月24日・25日	土・日	晴	八方山	羽田健三・山崎林治 寺島虎男・運営委員	66	会費70円
白馬岳市民登山	8月8日・9日	土・日	晴	白馬岳〜ヤリ温泉	福島覚他	33	620円
植物採集会	8月16日	日	晴	居谷里・木崎	寺島虎男	9	
地学講習会	8月29日	日	晴	木崎〜大町公園	平林照雄	7	
昆虫採集会	"	"	"	東山乗越	細野淳	14	
植物採集会	"	"	"	海ノ口〜やなほ	丸山晃	9	
来馬統化石採集会	9月11日・12日	土・日	晴	南小谷〜中土	田中邦雄	71	交通費
神社・仏閣見学会	9月12日	日	晴	王子神社〜天正寺	長沢欽平・青木治	17	
動物部講習会	10月10日	日	晴	博物館	細野淳	3	
「茸」採集会	10月17日	日	晴	常盤仏崎	寺島虎男	14	
山岳研究会	10月22日	金	晴	博物館	福島覚他	9	
地学部採集会	10月24日	日	晴	すく温泉	平林照雄	10	
標本コンクール	11月3日	水	晴	博物館	平林照雄他	32	
研究作品発表会	11月3日〜7日	一	一	"	細野淳・寺島虎男	12	
秋季総会	11月7日	日	晴	市役所階上	研究会運営委員会	85	
小鳥観察会	12月12日	日	曇	仁科三湖	羽田健三	5	
計				22回		676人	

り協力方申入れがあった。関係者相談の上、大町とアルプスの紹介のために撮影案内と指導に当ることを決めた。

- 6, 31年2月20日、本館の重要な普及事業として、又、PRの有力な手段として、月刊機関紙「やまと博物館」(150部)の第1号が発行された。その後、形式を変えて「山と博物館」となったが、今日まで70号にわたって、全国の愛読者に親しまれて来た。

## 昭和31年度

- 1, 北アルプス一帯を野外博物館として開設するための本格的な基礎調査の第一段階として、4月から居谷里湿原の総合学術調査が始められた。調査団は地元の研究者を総動員して構成され、囑託の羽田建三氏が総指揮に当たった。年間調査出勤人員は延600人を越え、収集資料は2,600余点に達した。
- 2, 日本に於ける最大にして最高の溪谷と云われる黒部、この黒部溪谷に関西電力KKは世界で数位をこぼる大ダムを建設するため、北ア赤沢岳をトンネルをもって貫く六町ルートの建設に着手した。ダムの発電能力算定のため、黒部川上流域の雨量調査が企画され、明石製作所と本館がこれに協力した。残雪豊かな5月から新雪の来る10月まで、数次にわたって長期入山し、20台の自記雨量計によって観測が行なわれた。館員出勤は延60人。本館の主目標は湖底に没する黒部溪谷をはじめ北ア全山を四季にわたって踏査し、北アの開発と自然保護の方向を見定めることにあったこの調査に当っては、館職員の他、次の諸氏が調査員として活躍した。——柳沢幸治、福島融、松沢宗洋、竹内剛久、武田陸男、福島則夫、——。又、往年の名ガイド大谷定雄、丸山武四の両氏(白馬村細野)には豊かな山の経験に基く指導を受けた。
- 3, 4月から始められた「白山脈」の撮影指導のため、羽田囑託をはじめ、長沢武、長沢修介らの調査員は館員と共に連日多忙な日を送った。この映画は32年3月完成し、文部省特選となった。封切に当って記録とフィクションの問題で話題をまいたが、よく一年間で高山の動植物の生態をとらえ、内外に紹介し得たことは大きな成果であった。
- 4, 本館施設の拡充を計画していたが、7月7日新築構想に踏み切り、9日、10日、11日と連日の建設推進委員会で検7月16日市議会に於いて大町南高校旧校舎の払下げを受けて東山台上に移築する案が可決された。7月20日直ちに地鎮祭が行なわれ、11月遂に堂々たる本館が実現した。
- 5, 数次にわたる黒部川上流域の踏査結果に基づき8月2日から5日まで、針ノ木岳周辺の開発構想が討議された。この結論は羽田健三氏によって「大町山岳博物館の構想」(黒部自然園)として発表された。
- 6, 6月9日講師に吉川宗雄氏を招き第一回「山の歌声」(参加35名)を開催した。以来「山の歌声」は毎月2回定期的に開催され、33年3月博物館事業から離れ、独立サークルとして大町市文化協会に加わるに至るまで、40数回にわたって開催された。この間、参加メンバーは200余名に達し、大町市における音楽愛好者の交流に役立った。昭和34年3月「山の歌声」グループは「市民合唱団」として再発足し、現在に至っているが中核メンバーの小田中善三郎氏や神事賢氏は「大町労音」の設立に貢献した。
- 7, この年、博物館研究会の活動は低調となったが、白馬六池における「第三回研究登山」をはじめ、数多くの野外活動が行なわれた。
- 8, 幾つかの調査活動のあいまに、市内文化財の調査が行なわれ、秋季文化祭を迎えて文化財特別展が行なわれた。

## 昭和32年度

- 1, 31年度の新館建設の継続として館内外塗装工事、給電、給水工事、廊下張替工事、玄関階段工事、館内模様替工事を



行ない、展示には鈴木貞三氏の手をわずらわしパネル形式をとり入れ、8月15日の大糸線全通を記念して開館、同時に祝賀式を行なった。ここに本館は創設以来6年にして東山段丘面の上に新館を開館することができ、飛躍的発展の基礎ができたのである。

- 2, 黒部川上流域雨量調査は前年度に引き続いて行なわれ、20台の雨量計による雨量データが集められたほか、黒部上流域一帯の踏査が行なわれた。5月より10月までの本館職員、調査員の延出勤日数は147日に及んだ。
- 3, 7月26日より31日までの6日間、主催市教委、実施機関本館並びに東京教育大学野外研究同好会によって夏季大学及び黒菱を根拠地として「第一回山の自然科



針ノ木調査

学教室」が実施された。都内6中学校127名の生徒が参加。指導には印東弘文(東京教育大学・植物)、鶴田総一郎(国立自然教育園・動物)、羽田健三(信州大学、動物)、田中邦雄(信州大学・地質)の諸氏のほか本館職員、調査員、教育大学学生らが当たった。自然に恵まれない都内の中学生には、八方山や大町市の自然が強い印象を与え、山都大町市の紹介にも意義深いものがあつた。

4、7月15日から30日まで東京教育大学の博物館学習が行なわれ、鶴田氏の指導の下で37名の大学生が山岳博物館をとおして、博物館学の実地を研究した。この試みは中央との提携の新しいケースとして注目され、将来日本の博物館をになう学芸員の養成に役立った。

5、前年度に続いて針ノ木自然園の開設運動が進められた。5月30日厚生省・文部省の意向を聞き計画具体化に着手。8月に水気象調査に並行して、御山谷・タンボ

高地・ダムサイト付近・立山・剣岳・阿曾原方面を実地踏査。観光課と連携をとり、観光審議会の設置を促進し、33年3月発足当初の観光審議会において基礎調査を正式にとり上げた。又同月鶴田氏を招いて扇沢一帯の現地視察を行なった。北ア自然園の構想は本館創設当初よりの計画であり、関電黒四ダム建設工事の進行とともに可急的に実現すべき段階に入ったのであるが、32年度末において、ようやくにして、市の総合的観光開発の一環として具体化できる見通しがついて来た。

6、32年7月厚生省国立公園部より、本館職員・調査員8名が、夏期自然公園適正指導員に委嘱された。指導員は奥黒部水気象調査(雨量観測)と並行し登山者の指導に当たった。

取扱件数120件。又、33年1月冬季指導員5名が委嘱された。以来今日まで、毎年本館関係者が指導員として機会をとらえてはその任に当たっている。

7、9月に入って、総合社会教育の一環としてグループ活動の育成がはかられた。黒部川上流域雨量観測を担当した調査員らによって「登山研究会」が構成され(11月17日)森義直氏、(大町北高校)寺島卓氏、宮下和人氏らは天文研究グループ「銀河会」を発足させた(11月7日)。又、坂田悦男氏を講師として染色技術実習が行なわれ、「染色の会」が発足した(10月23日)、昭和33年1月7日、「登山研究会」は博物館同好会から独立し、本館嘱託学芸員の福島融氏を会長に迎え、その名も「大町山の会」と改め、自主的山岳団体としてスタートした。

8、恒列の文化祭には南極観測に因んで南極展が行なわれ、好評を博した。

9、幾つかの事業が夏期に集中したので夏期における職員の勤務は過重を極めた。

## 昭和33年度

1、昭和33年4月から針ノ木自然園開設のため、信州大学教育学部生物学教室の協力の下に、組織的な基礎調査が進められた。調査主任の羽田健三氏以下43名の調査員は10月までに延日数443日を費やして入山した。貧弱な装備・器材にもってして交通費実費しか出せないという状態の中で、調査員各位は献身的な善意をもって、針ノ木岳の自然ととりくみ、短期間で多大の成果を収めた。その成果は33年度末までに集成され、34年6月10日、80余ページに及ぶ「針ノ木岳」——自然とその保護——として出版された。又、この調査に当たっては、沼田真氏(千葉大学)をはじめ多くの方々の指導を受けた。

2、4月29日から5月5日まで、上原遺跡と信濃考古展が開かれた。県下各地の貴重な考古資料が一堂に集められ市民の関心を集めた。

3、前年に継続して第二回「山の自然科学教室」が7月25日から7日間にわたって、夏季大学並びに、黒菱小屋をベースとして開かれた。都内中学生115名のほか、印東弘文氏(東京教育大学)、付添教師19名、教育大生14名、本館関係者13名が参加した。

又、7月17日から5日間、木崎湖畔で開かれた奈良帝塚山学園の林間学校開設を後援し、150名の小学生の指導に当たった。



- 4, 自作スライド講習会(6月22日) 映写技術講習会(7月9日) 公民館分館への映写機貸出し, 技師派遣, 映画・スライドをもつての移動博物館(市内9分館)などを行い, 公民館との提携の下に視聴覚技術の普及につとめた。
- 5, 6月21・2日には松本・大町地方の同好者を集めて「エンレイソウをたずねる会」が持たれ, 又, 8月9日から4日間, 千葉県生物学会・信濃生物学会共催による海と山を結ぶ「交換生物研究会」が大町で開かれた。その他, パタゴニア探検写真展(8月19日~21日) 少年野外教室(3回) 星を見る会(12回)などが行なわれた。



### 昭和34年度

- 1, 数年間活動のおとろえていた「博物館研究会」は「博物館友の会」と改称し, 山菜採集会(5月25日) 小鳥の声を聞く会(5月31日) 鹿島の自然をたずねる会(6月14日), 南小谷植物採集会(6月20日) 八方山研究登山(8月12日) 星を見る会(6回) 標本同定会(2回)など幾つかの事業を行ったが継続的指導に欠け十分な成果は上らなかった。第三回「山の自然科学教室」は都内中学生を招いて成功裡に進められた。(7月21日~25日)
- 2, 針ノ木自然園の基礎調査は前年度に引き続いて継続され, 7月28・29日には国立科学博物館の奥山春季氏を招いてフロラ調査を行い, 7月6日からは千葉林司館員を中心に白沢岳一帯のニホンザルの生態調査が開始された。又, PRの一助としてカラースライド「針ノ木岳」が作られ, 16ミリ天然色映画「自然園の四季」(未完)の撮影が始められた。
- 3, 市民集団登山(公民館共催, 8月1日), カラー写真講習会(文化協会共催, 7月12日)など一般市民対象の普及活動も行なわれたが, この面に関しては低調であった。
- 4, 7月12日から8月1日にわたって, 高橋学芸員は横浜市立大学の知床半島探査隊に植物調査員として参加し, 多くの資料を収集した。
- 5, 文化祭を目標に地元と全国の民芸資料の収集がはかられ, 11月1日から7日間, 「全国民芸品展」が行なわれた。
- 6, 6月12日嘱託の古川潔氏が新たに館長代理として就任した。昭和35年1月には, 社会教育係長兼本館主事の内山慎三氏が観光課長として転出し, これにともない, 針ノ木自然園計画は全市的な観光開発計画の中に位置づけ, 県・民間とタイアップして強力に推進するという基本的な方針が打ち出された。
- 7, 赤字をかへた大町市は遂に地方財政再建特別措置法の準適用に踏み切った。35年度予算編成に当っては, 山岳博物館の最低維持管理費を割る予算わくが管理事務当局から示され, 議会に於いても, 山岳博物館の廃止転用論まで飛び出すという思わぬ事態に直面した。館長代理制をやめて, 更に職員一名を減員, 一名を兼任とし, 事業費は皆無同然に削った予算案が, 年度末の3月30日までみ抜いてようやく可決された。

### 昭和35年度

- 1, 創設期から10年にして, 山岳博物館は最も苦しい立場に立たなければならなかった。然しながら, 厚生省が針ノ木自然園の計画を了とし, 山岳博物館の建設を含む扇沢地域集団施設計画を進めつゝあったことは, 山岳博物館関係者にとっては心強い限りであった。
- 2, 昭和25年以来「山岳博物館生みの親」ともたえられ, 10年間大町の玄関口にあつて人々に親しまれて来たオオハクチョウは35年4月1日の朝死亡していた。捕獲にまつわる悲しい物語りを知る者や, 日頃この鳥の姿に接して来た子どもたちは, 等しくその死を惜しんだ。はからずも4月中旬同じストーリーを秘めて諏訪湖へ飛来中のオオハクチョウが傷ついて本館へ入園した。
- 3, 高山植物コマクサの生態ならびに低地栽培についての研究が長野県から委託され, 平林国男学芸員を中心に研究がはじめられた。これを期に本館庭にロックガーデンが作られた。9月には志賀高原, 白根山のコマクサの実地調査が行なわれた。
- 4, 日本鳥学会, 林野庁が主体になって北アルプスのライチョウを富士山へ移殖する試みが進められた。本館も鳥学会の要請に応じてこれに協力した。8月21日, 白馬岳のライチョウ7羽が関係者の手によってヘリコプターで富士山へ移された。

- 5, 8月5日から10まで本館において信州大学生物教室の野外実習が開催され、白馬岳並びに針ノ木岳の研究登山が行なわれた。又、高校生を対象とした植物生態研究会も数次開かれ、恒例の大町高校集団登山にも館員をリーダーとして派遣した。
- 6, 6月以来民俗資料の収集がはかられ、館員は近くは市内から遠くは山村の集落まで足を伸ばし、多くの資料を収集した。古びた民俗資料を多くの人々がよろこんで無償で提供してくれたから集まったのもである。11月3日から7日までの文化祭には「民俗資料展」を行ない集められた郷土の民俗資料を公開し好評を得た。
- 7, 博物館友の会では探鳥会(5月29日)、キャンプ講習会(9月11日)、秋の草花と鳴く虫の観察会(9月18日)、冬の動物飼育(12月4日)、クリスマスのついで(12月25日)、冬の動物観察(36年1月7日)、スキー会(1月29日)、雪まつり(2月3日)、冬の星をみる会(2月11日)水鳥観察会(1月19日)など活潑な活動が行なわれた。又、一般市民対象の事業としては、山と郷土の相談室(5回)、山岳映画と幻灯会(博物館製作スライドの発表、7月20日)、高山植物をたずねる会(7月30日、戸隠)、8ミリ映画と座談会(11月10日)などが行なわれた。
- 8, こうしたあい間にも高橋は中村武久氏(農大)らと南アルプスの植物調査(8月19日~25日)を行なった。又、本館の外かく組織である「大町山岳研究会」は登山ガイドブック=白馬岳と鹿島槍=を出版した。
- 9, 昭和36年1月23日、木崎湖に1羽のオオハクチョウが来ているという情報が入った。直ちに館員が直行し、これを確認した。大町市にオオハクチョウが訪れたのは実に11年ぶりであった。この1羽のオオハクチョウの保護運動は更に木崎湖水鳥園の実現運動へと発展して行った。
- 10, 昭和36年3月27日、皇太子殿下が来館された。殿下の来館をひかえ、駐車場、館庭の整備、館内壁面の改装を行なって面目を一新した。殿下の来館された当日は晩雪のぬかるみに加え、北アの展望がきかなかったことが惜しまれた

### 昭和36年度

- 1, 昭和35年度において本館の外かく組織である「北ア動物生態研究グループ」の「ライチョウ調査」に対して、長野県科学振興大会から30万円の助成金交付が決定した。資金の裏付けを得た本館では、本年度重点事業として信州大学教育学部のメンバーと共にライチョウ調査を爺ヶ岳一帯に於いて進めることにした。5月10日入山以来、10月7日まで150日連続して調査が進められた。調査員は梅雨の降り続く日も、台風の荒れくるう日もベースハウスの種池小屋を守りつゝ観察を続けた。こうして、ライチョウの生態に関し今まで知られていなかった数々の新しい発見がなされた
- 2, 日本における渡り鳥の恒久的継続調査を行なうため、林野庁・山階鳥類研究所が主体となって、全国10ヶ所で予備調査がはじめられた。本館は主催者の要請に基き長野県のポイントとして、大町地域一円において、野鳥標識調査を行なった。この調査は長沢修介・興水太伸・長沢武・大倉多助・北原和好らによって進められた。
- 3, 国鉄映画撮影にカモシカ出演(5月17日)、小鳥の声を聞く会(5月28日)大町高校集団登山ヘリーダー派遣(7月18日・19日)八方山日帰登山(7月2日)日本アルプス観光連盟主催の登山教室ヘリーダー派遣(7月24日)第5回「山の自然科学教室」(7月24日~30日)針ノ木岳市民集団登山(7月30日)コマクサ調査等、さまざまな活動が行なわれた。
- 4, 8月9日本館の動植物園管理係神社唯七氏は、駅前水禽舎附近において公務執行中卒然脳イッ血で倒れた。直ちに入院、看護するもその甲斐なく、市立大町病院で翌10日9時水眠された。葬儀は8月20日中原公民館で行なわれた。1ヶ月半、動植物園管理係は欠員であったが、9月26日、後任として荒井幸亀氏が就任した。
- 5, 針ノ木自然園の開設運動は市観光課を中心として進められて来たが、山岳博物館が担当するライチョウ・カモシカ・ニホンザル等の生態園の基礎調査は39年の大町ルート解放を前にして早急に進めなければならない段階を迎えた。このため、ライチョウについては36年度中に冬季調査をも推進するべく、その資金面対策が急がれている。
- 6, 動物園移転新築の必要は新館が開館した時からの懸案であったが諸般の事情から未だに実現していない。遊び場の全くないような飼育舎で特別天然記念物のカモシカが飼われていることを思うと一日も早く、良い飼育施設を実現しなければならない。
- 7, 前年度末、1羽のオオハクチョウ飛来を期に始められた「木崎湖水鳥園期成運動」は地元の海ノ口地区の子ども会公民館、平親友会その他関係者の全面的な協力を得て進められた。木崎湖は開館創立10周年記念日の昭和36年11月1日、猟期を前にして禁猟区となった。
- 8, 昭和36年11月1日、本館創立10周年を記念し、「山と博物館」特集号が発行され、記念式典が行なわれる。

# 回 想

## 山博10周年を省りみる

### 開館の頃

石原守明

10年ひとむかしという言葉があるが、山岳博物館が誕生してから、ちょうど10年を迎えることになった。私も創立この方連続10年間に委員を仰せつかってきたのだが、くる年も、またくる年も、とほしい予算の中で、もがきつゝもよくぞ、こゝまでできたものと、うたゝ感慨無量なるものがある。

そのかみ、昭和24年頃、いわゆる戦後の混迷うづまく中から、郷土の文化を求めてやまぬ若人の結集は、羽田先生など、よき指導者を得て着々その基礎を固められたのだった。燃ゆるようなこの熱意は、やがて町議会をして資料蒐集費の支出を議決させたのであるが貧しい地方自治体が、このような面に支出を議決したことは、当時としては、けだし異例でもあり、また英断でもあったわけで、その折議席にあった私には印象的なことだった。

若人たちのためなめ努力は、やがて次第に数を増してゆく資料となって現われ、公民館の一室にあつめられたのであるが、さてこれからの段階が大変で、博物館の建設などは議会筋では全然問題視されなかった。

そこで、博物館建設推進委員会をつくって強力に働きかけることになり、私とその委員長に任せられたのであるが、理想の彼岸は遠く、当初夢みた鉄筋コンクリート建てなど及びもつかぬことだった。

艦航機変遷の末、漸く昭和26年の秋になって、旧富国織維の建物を転用して、ともかく開館することに決った

のであるが、御粗末な建物の手入れは、思わぬ予算外支出を伴い、やり繰り算段にまた四苦八苦する始末だったそれでも関係者一同の涙ぐましい努力の甲斐あって、開館予定日、11月1日の晩に及んで、漸く一応の準備を整え終り、館の庭で焚火をかこみながら、喜びをわかちあったものである。

あれから10年。――まさに、いばらの道を踏みこえつゝも、逐年その内容も充実して当時の館も現在は大町公園の高台に移設されて面目を新たに、訪れる人々も殆んど日本全国に亘っており、更には皇太子殿下を始め宮様方もお出になるなど、文字通り内外にその存在価値を認識されるに至ったことは、関係した一人として、心から喜びに堪えない。

今年年経るごとに数を増す登山人口と相俟って、近くはまた天下にクローズアップされる日の速くない秘境黒部のことどもに想いを至すとき、山岳博物館の使命は一段と重きを加うるわけであるが、やゝもすれば地財法適用下であって、その活動も極度に制約されるのみか、存在をすらすら軽視する向のあることを聞くに及んでは、まさに寒心に堪えない次第である。

山博満10歳のこの年、この日こそは、まさしく観光大町市にとっても、飛躍へのスタートラインに立つことを意味するものでなくてはならない。

心静かに大町市のゆく手を洞察し、岳都としての未来

図に誤りなからしむる事こそ極めて肝要ではなからうか。動物舎の移転も未だに実現の運びに至らない現状であるが更に針ノ木自然園の構想もダムサイドへの分館の設置もすべて観光大町市の経済発展に寄与する根底をなすものである以上、徒らに足踏みすることを許されない時期に立っていることを銘記し、速かに軌道に乗せられんことを切望するものである。

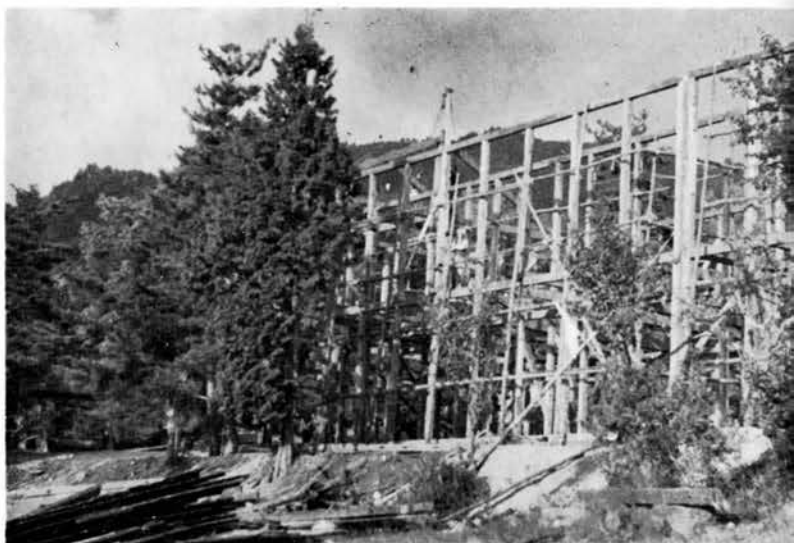
(山博協議会委員)



# 博物館新築の想い出

伊藤 半二

思えば昭和26年11月1日菊花かおる秋晴れの佳日、大町山岳博物館が神楽町富国せんい会社の講堂を改修して文部省社会教育局長や著名な山岳家塚本閣治氏をはじめ博物館関係者その他郡内外の有力者多数を迎えていとも盛大な開館の式典が行なわれまして以来、茲に10年の才月を過ぎました。私が昭和26年3月町議会議長に選ばれ更に郡や県の議長会長に選任せられまして当日は、町村議会を代表して祝詞を述べたのでありますが、当日を回顧しまして今回理想の地、東山公園にあの堂々たる山岳博物館が建設せられ、しかも本年3月には思ひかけぬ皇太子殿下の御来館に続いて高松宮殿下御夫妻や秩父宮妃方をお迎えして御鑑賞をいただくほどに内容も充実発展いたしましたことは、当時夢想だに、せざりと申しても過言でなく真に偉なるかなであります。こゝに改めて生の親、羽田健三信大助教授、内山慎三・阿部徳与両氏をはじめ、以来幾多の苦難に堪えて献身的な努力を続けておられます、館員諸氏や若い協力者諸君に深甚の敬意を表します。現在の博物館は去る31年大町高等学校（旧大町南高）の校舎改築に当り地元大町が県から譲受けて移築したことは既に周知の通りであります。当時私は大町高校の同窓会長であり、この思い出深い校舎を同窓会館として移築永く保存いたしたく、県教育委員会に陳情したのでありますが、県教委としては一部でも他に利用せぬ条件ならば無償譲渡も可能であるかとの難問でありました。あの400坪余の膨大な建物の利用にきような至難な条件付では処置なしとなかば諦観の折偶、山博運営委員長伊東伊三郎氏と阿部徳与委員の来訪があり席上は博物館に転用はどうかと相談を受け、相携えて松田市長の意見を出して後、大町高校長中山先生や、同窓会役員に計り



結局由緒ある校舎が、そのまま東山の高台に移築せられ朝夕仰ぎ見かつ山岳博物館として立派にお役に立つならば一石二鳥で勿論異議はなく更に進んで県教委との折衝にも御力を惜しまないと、すこぶる好意的な確約がなされたのであります。

かくして山博は新館建設にスタートし先ず山博建設推進委員会を結成して、私他9名の諸君がその常任委員となり促進に当たったのでありますが、いよいよ実施の段階で移転費300万円の捻出と、負施工者の選定でほとんど困難し幾多曲折の末、幸い同僚市議石原一二三氏の好意で伝刀組犠牲を顧みず移転一切を引き受け、又財源措置は時の税務課長県聴氏（現大町市総務課長）の配慮で漸くにして、難関突破となり31年7月20日に地鎮祭、10月12日上棟式、更に翌32年8月3日に完工し同15日新館落成の開館式がめでたく行なわれそして御覧の通り高台にその偉容を誇示し全国稀少な山岳博物館として、内容も充実整つて今や地方文化の殿堂とし、観光方面でも多大の寄与をいたしておることは、真に御同慶の極みであります。由来創業は易く守成は難いとされております。こい願わくは市関係各位は勿論のこと市民各位の一層の御理解と、絶大な御協力で、初期の目的を完遂博物館の使命の達成を切願する次第であります。終りに館員諸氏の一層の御健闘をお祈りいたします。

（前大町市議会議長）





# 山の自然科学教室の思い出

印 東 弘 玄

山の自然科学教室がはじまってから、早いものでもう四年も経ちました。今年は第五回目で、これもこの七月に盛大に行なわれたのは、本当に嬉しく思います。この催しは、大町山岳博物館の方々と教育大の野外研究同好会の学生達とが、文字通り一致協力して、東京の若い子供達をつれて、山を愛し、山に学ぶことを指導するもので、その規模から言っても、まさに類例のない事業だと思っています。

そもそも私は昭和二十二年に、この第一回が開かれるに当って、当時教育大の学生であった諸君から、自分達は大いにやるから、私にも来るようにという誘いを受けたので、野外研の顧問という責任感から、むしろ引ずられるようにして出かけたのが、偽らないところです。しかし、一度出かけてみてからは、山博の方々も学生諸君も、実に理想的な活動をされるので、まことに見ても楽しく、また私自身にとっても、勉強になる催しなので、それ以来私はすっかり山の自然科学教室のファンになってしまいました。

いよいよ明日は山にかゝるという晩には、リュックサックの中の物を前にならべて、一つ一つをどのようにして、つめたらよいか、またサックの紐はどのように結んだらよいか、熱心に指導される山博の方々の話は、都会に住んでいて、五十を超えるまで基礎的な山の訓練を受けていなかった私には、大へんな役に立ちましたし、また登山の実際にあたりパーティーリーダーのすぐ近くを同行して、確実な足の踏み方を学ぶことができたのも実に有益なことでした。そしてこの教室でこのような訓練を受けている、東京の子供たちを本当に幸福だ一と感じて来ました。

都会の子供はどうしても、自然にふれるチャンスが少ないので、自分の両足で開放された大地を歩くことそのことが、楽しみなのです。木崎湖畔・居谷里温泉・葛温泉と年によって多少の違いはありましたが、緑の木の下や草の上での一時は、彼等には心からの喜びです。私は毎年これらのところで、若い諸君と仲よくなれるのが楽しみです。そしてそれらの諸君の中には、後々までも便りを交わすほどにまでなった人も少なくありません。しかし、これにも増して印象深いのは何と云っても、もっと高い山

そのものであると言わねばなりません。細野から一歩一歩を踏みながら、蛇紋岩を母体とする土壌の滑り勝な急場をすぎて、白馬の大雪山を指呼の間に眺める壮大な景色の展開はまことにすばらしいものです。私は毎年必ずこの尾根で、私自身も山の味をしみじみと味わって来ましたが、子供たちの喜びをみて一層の嬉しさを感じます。一足外に出れば、すぐ電車やバスがあり、日常の必要物資も軒並みの店で売っているという環境での都会生活に馴れた者にとって、山小屋の味はまた格別です。ことに水がいかにか有難いかを身にしみて感じることもこの生活だといえるでしょう。今年のことでしたが水が天候のため殊更少なかったので、朝の洗顔は禁止されました。そして、生活係から山で水のない時にはササの葉のしずくで顔を洗うものだという話を聞かされたのである学校の生徒が何とササの葉で顔をなでまわしたために、顔中がかすり傷だらけになったという失敗の巻もありました。

黒菱小屋から上は何と云っても本当の高山の中と言わねばなりません。一昨年は、残念ながら天候にめぐまれません、それでも行けるところまではという方針で、山の自然科学教室の大部隊は隊列を正しながら、第二ケルンの雪渓まで登りました。しかしちょうど昼頃アメツバメの飛行も盛になり、雲の濃さがやや迫って来たように思ったとたんに、大粒の雨が降り出して、雨中で立ちながら握り飯を食うという経験をしたことがあります。この天候の急変に対しては、チーフリーダーから適切な隊の集結と下山の命令が出されて、一人の事故者もなく小屋に戻ったわけでしたが、これに対し数多くの子供達、山の天候の急変を体験し得たとか、登山には適切な手段や登山に事前の準備が重要であるということを実に体験したという反省記を書いていました。こゝにも山の自然科学教室の深い教育的意義があるのだと痛感したことでした。

毎年教室の最後の晩には、キャンプファイアーまたはそれに代わるものが行なわれます。今年の教室の時には、特にその夜の天気が良かったので盛大なお祭りになりました。子供らを集めての催しですから、大人達も一滴のアルコールもたしなみません。しかし燃えさかるかまど火を囲んで、各パーティーが競って演じる音楽や寸劇のうちに溶けて行くと、楽しい行事そのものに恍惚となって、酒の酔に勝る楽しみにひたつたことでした。名残りは尽きねどの歌を白馬三山の峰にこたまさせて、かまど火も衰え、子供等が三々五々小屋の寝床にはいったあと、空を仰げば、文字通りダイヤモンドを散りばめたような星空に、山気の爽快さをしみじみと味わったのでした。

山の自然科学教室の思い出と題し、いさゝか感想をのべましたが、また来る年もこの催しの成功を祈って筆を置きます。(教育大学教授)



# 針ノ木岳の調査を省みて

山崎 淳

今から三年前、大町山博並びに関係各位の御指導と御好意により、当地の森林調査をさせていただきました事を先ず深く感謝する次第である。こゝでは、当時を回顧し思い出や反省、これからの問題点などを私なりに綴って、色々と御批判、御指導の程をお願い致します。

どこでも問題になる金銭的な面では、旅費をはじめ宿泊費、食費までも山博側で心配して下さったので、学生であった私たちにとってはあまり事欠かなかった。むしろ、最初にぶつかった壁は、調査の方法上の問題であった。最初に案内され針ノ木峠より見た全調査地域の広大さ、はるか東方雲の中に霞む峠が岳を望んだとき、こう云う調査を初めて行なう私にとってはその雄大さにただただ茫然とするばかりだった。この広大な地域で植生図作成、群落構造の解析、林床植生の季節的サクセッションと云う内容の富豊さ。何も知らぬ私にとっては全くの恐怖だった。そこで、春の4～5月の残雪期には全域の層化、雪の消えた所から林床植生のサクセッション、盛夏には群落構造調査、秋に補足調査と云うように仕事の内容とその調査計画を綿密に組んで立ち向かったのであるが、それでも夏の最盛期には仕事が重なってしまいどうにもならないこともあった。また、時には悪天候のため殆んど調査ができず、むなしく帰らねばならなかったこともあった。時には、日程の関係で少し無理を承知で出かけ、とうとう食糧もテントもなくピバークせざるを得ない羽目に追い込まれた事もあった。結局長野から現地へ入るのにたっぷり1日かかってしまうような遠路を月に二度ずつ通って調査を行なったため色々の面で時間的なロスが大きく、その上上記の如く調査の規模、内容が大きすぎたためどれもこれもアブハチとらずに終わってしまったような気がしてならない。

以上はさまざまな苦しい思い出や調査の反省であるがこの調査を通じて私たちはいくつかの教訓を得た。

先ず、感じた事は、あの原生林こそアルプスの雄大な自然の中に於ける文字通りの「美しき天然の美」である。私たちの想像もつかぬ程の規則正しい植物のCommunity、群集の垂直的水平的分布、各群集内の相視の美しさ、全く目を見張らせるものがあった。あのブナの荘厳な純林の中へ入ると、思わず「ブナの森の葉陰れに……」、口ずさみたくなったものだった。

ところが、こゝに一つ悲しむべき事件にぶつかってしまった。それは7月だったかと思う。そのブナ林がむざむざにもどしどし伐採され出したのである。近代文明の進歩に伴ないバルブを中心として森林資源に対する需要の

急増はよくわかっているが、こんな1600m級の山の奥でしかも国立公園内まで開発？の手がのばされているとはいきどうりを感じざるを得なかった。そうして天然の美はたち所にこわされて行っている。私たちにとっては全く憂うべき事件である。三好博士の言「日本の森林資源問題」によれば日本の森林資源の生長率、伐採量の変化による保存年数(利用可能蓄積)を見ると現在の蓄積量は27.2億石、年間伐採量1.2億石、生長量0.66億石として保続年数33年、生長量1.088億石として保続年数60年他は前記の通りとし、伐採量1億石とすれば、生長量0.66億石で47年、0.87億石で65年しか保続できないと云われている。即ち、現在の消費状態が続けば、わずか数十年にして、我が国の森林資源は枯渇してしまうのである。その上、かくして山が全て赤肌になった時、その山のすそ野の河川の流域でどんな現象が起りうるか、云わずと知れた事である。天災の多い我が国にますます天災(いや人災と云った方がよいかも知れぬ)を招く結果となる。そして観光日本の美事な緑の山河も一蹴されてしまわんとも限らない。

そこで営林署に一言、苦言を呈したいのである。高山植物の保護と同様に、森林資源の保存にもっともっと厳然とした手をうつべきではないだろうか。少なくとも国立公園内のあの自然の美林(私は高山のお花畑にも増すものがあると思う)には手をつけるべきではないと思うこれは高山植物の保護以上に重要な問題が含まれているように思う。

又、私たちとしては、自然保護の立場に立って少しでも多くの少しでも正確な基礎資料を提供すべく、更に一層徹底した学術調査を行なって行かねばならぬと思う。しかし、これを遂行するためには、何と云っても先に立つものは金であり、地域社会の理解と協力が必要である最後に関係諸方面の絶大なる理解と協力、先輩諸兄の御指導御鞭達の程をお願いして、この細々な一文を閉じたいと思う。

(戸隠小学校教諭)



# 奥黒部雨量観測の思い出

柳 沢 幸 治

荒寥として凍てついた尾根筋は、厳冬期の山のように風雪が荒れ狂っていた。一昨日の夕方から大きく崩れた春山の天候は二日二晩、霰をまじえた風雪が今日も又何時果てるともなく雪煙を舞い上げて吹きつづけていた。

快晴の日ならば、船窪岳、不動岳は手のとどくようなところに在り、烏帽子岳から連なる裏銀座、燕岳からの表銀座の各稜線は紅に燃え、遙か彼方、槍・穂高の山塊を一望に眺めることができる。ここは針の木峠の小屋である。底知れぬ静寂の一瞬が過ぎると、小屋をも吹きはらおうとする強風と、床下から伝わってくる地鳴は一步も人を寄せつけまいとする凄じさがあった。このような条件下の針の木小屋にたむろしているのは、山岳博物館雨量観測班のメンバーだった。

引返すべき道はすぐそこにあっても、降りしきる新雪は一夜にして針の木大雪渓を雪崩の巣と化してしまった。目的地、黒部本流への道、針の木谷もこれと同様であった。

少人数の観測班と、わずかな日程で最大の効果を上げるべき意気揚々と、溜川谷から春の日に半ば潤んだような針の木大雪渓を登って来たのだ。しかしこの悪天候では、私達は陸の孤島となった峠の小屋で唯天候の回復を祈るより方法はなかった。

山岳博物館の登山装備・登山用具の不備な点は今でも余り変りないが、当時は絶対量の不足から種々の登山計画には相当無理な面がみられ、特に積雪期の登山においては、今では一寸考えられないような無謀とおもわれる登山が行なわれており、その行為が例え危険であると解っていても遭難に通ずる道を度々私達は歩かねばならなかった。この時の山行も炊事用具は勿論、積雪期に必要な装備も大分持ち合せていなかった。だから、出発前の計画では峠の小屋は単なる一夜の仮寝の宿に過ぎなかった。小屋の中は吹き込んだ雪が消えないままに残っていた。雪と氷のへばりついた薪を、鯉節を削るように小さく割りどうにか火だけは燃やすことができた。

炊事用具を携帯しなかった私達は、冬山において大学山岳部の使い残した石油缶で即席のカマとナベを作った。

シヤモジは小屋の中にあつた一枚の板切れだった。石油缶で炊いた山の飯は、気圧が低かったのか、薪が燃えなかったのか、あるいは、圧迫されつづけた精神状態が食欲を呼ばなかったのか、私は米も煮方の如何によつてはこのような御飯もできるものかと驚異と絶望のおもいで食事をしたのが、昨日のこのように一つの鮮明な思い出としてよみがえってくる。

吹いて吹いて、吹き抜いて明けた入山四日目の朝、依然視界は乳色の霧に閉ざされていた。しかし私達は燃えない這松の煙に悩まされ、吹雪と寒気で攻められ、一片の詩情さえ湧かない峠の小屋を、煙でいぶされた狐のように目的地目差して逃げ出した。山の危険、この言葉は攪乱された私達の脳神経では考えも及ばぬことだった。途中、軽い表層雪崩に巻き込まれたり、氷りついた丸木橋から針の木谷の激流へ放り出されそうな危ない目に会いながら、全層雪崩の爪跡も新しい針の木谷を一目散に黒部本流目差して突っばした。

黒部川本流と針の木谷の出合、そこに風と雪で痛めつけられた名ばかりの吊橋があった。サーカスの綱渡りのように、この吊橋を渡ると一軒のひなびた山小屋がある。そこが平の小屋だった。

黒四の大大ルートが完成した現在では、御前沢のダムサイトから、平の渡場迄はモーターボートで飛ばせば時間にしてたった20分の地点になってしまったが、あの頃は平の小屋附近を含めて、黒部川源流へ入るのに、ヘリコプターの使用以外は人里から少くとも二日～三日間の行程を要した。一口に二日間と云つても、喧騒とした街の生活から完全に隔絶された二日間という距離であり、その隔絶がかえって安堵を与え、心の安らぎが得られる。白樺や樺の原始林の匂いに勇気が満ちて、原始人となったような錯覚を起させ、秋の透明な大気の中で、ふと、いとおいしい恋人の吐息に触れた時のような、心の睡然たるものを覚えるのだった。

しかし、私は、今別離の情でいっぱいである。青春の匂いのいっばいにしみ込んでいる、古ぼけた一枚の黒部溪谷の地図の中でその多くの地点を青く塗りつぶさなければならぬからである。赤牛、水晶、鷲羽、三俣連華、雲の平、黒部五郎、上の岳、薬師、五色ヶ原、立山…思い出の山々。想えば幾歳月、風雪に耐えて来た自然達は、再び春の息吹を鼓動することもできず、谷合に美しく燃える落日の陽に照らし出されることもなく貯えられた湖底に沈まんとする。私は、私なりのささやかな挽歌を、黒部溪谷の空へ向って送るのであろう。(山博調査員)



# 八方登山の思い出

太田 愛子



博物館の主催する集団登山に参加して、早や七年、当時高校二年の私はクラブ活動で地学部に所属していた関係で、前から八方の地質、岩石など調べ、一応予備知識をもっていたのでチョットした石屋（地質学者）気どりで、岩石用ハンマー、地質図、クリノメーターを持ってさっそうと出かけたのを、つい最近の事のように思い出します。思い出せないものは八方の細かな地名と、高山植物の名前、その後何回となく登っているにもかかわらず、ついにおぼえることが出来ないでいます。ケーブルの出来る以前の事でしたので、小さな石のころころした沢を老若男女列をつくって登っていく中を博物館の山男連が上へ下へカモシカのように飛びはねて道案内や指導をしていたのを見て、私達はこんなに苦しいのにどうしてあんな芸当が出来るのか不思議に思ったものです。しかし黒菱小屋から登りは皆大変だったらしく、おとなしかったので、やはり人並だった事を安心しました。

登りつめてようやくあの広い湿地帯の薬大のヒユッテのある所へ出て草の中へ寝ころんだ時の空気のおいしかった事、汗でぬれた身体にここちよい風、山に登ったことのないものには味わえない一しゅんでした。その後動物（昆虫）地学、植物の各班にわかれてそれぞれ専門分野の活躍がはじまりました。私達の専門は地学、登って行く道には蛇紋岩、第二ケルンの下には緑色の鉛を含んだ岩石がある、第二と第三ケルンの間に違った岩石の層がある事など一応勉強して来たつもりが、八方尾根を駆けつりまわっているうちに、きれいに咲いた高山植物やチョウチョウに目をうはわれ、折角おぼえたことを忘れてしまったこともあります。

我等の親分、信大の田中邦男先生の指導をあおいだにもかかわらず、高山植物の名をおぼえるのにやっきになってしまい、それがいまでは二、三をのぞいてほとんど忘れてしまいました。その後登るたびに「きれいだなあ」と思いつつも、名を調べるでもなく過しています。知らないほうが、来るたびに興味をもってお目にかかれるからと、一人こじつけて自己満足しております。第三ケルンからようやく自分をとりもどし、第一ケルンまでの、帰り道を田中先生の石屋漫談に疲れている足を物ともせず、と云うより疲れも忘れて聞きアット云うまに着いてしまいました。帰り道はそれぞれに収穫物のじまんをしながら足とりも軽く細野部落へと下ったわけですが、私達石屋のリックは石ばかりでいくら自慢してみても手にもって見せられるようなものでもなく、その上チョウチョウや植物のように、見てきれいだとか、めづらしいとかかわかってもらえるものでもないのです。重い石をかついでただもくもく歩きました。このときほど石屋のしょうばいがうらめしく思われた事はありません。

専門家気どりで来た朝の事を思い出し一人赤面しました。しかしこの八方登山の時から私は山のすばらしさに魅せられたのでした。以来何度となく八方に登っていますが、ケーブルが出来てからは第三ケルンの上のカンパの林に入るまでは、山の感じのなくなってしまったのは残念です。

思い出と云えばその後の白馬大池の登山、居谷里湿原の調査など数かぎりなく思い出されてきます。しかし、この三年ばかり職場の仕事に追われて博物館の行事にもごぶさたですが今後このような登山、調査等市民のと云うより各分野に知識のある人達の活躍の場を提供し大いに活用していただいて市民と博物館が一体になってたゞ物を並べるだけの博物館ではなくして、科学研究のセンター的な役割も持っていたきたいと思えます。そしてまた、博物館が我が国唯一のものである以上、それにふさわしい資料をそろえていくことを希望しています。







## 新しい動物園の構想

山岳特有のカモシカ、ライチョウを始めとする各種の動物は急速な国土開発の進展によって大きく生活圏がせばめられつゝある。しかしながら現在、これら動物たちの保護をねらいとした諸施設は全く見られない。

当館では開館以来、この大きな問題ととり組み、中部山岳を中心に幾多の調査研究を重ねてきた。そしてその結果とたび重なる検討の結果、山岳動物の保護のための一施設として山岳動物園(仮称)を計画したのである。

この山岳動物園の意義について簡単に記してみたいと思う。

まず山岳動物園では、動物を通して自然に、対する理解を深め、自然に親しむ心と動物を愛する精神を養っていききたい。また天然記念物として保護されなければならない動物は、自然界では殆んど接する機会のないものや生態的な基礎調査は驚くほど進んでいないものが多い。山岳動物園は動物の総合的な調査研究の施設としての機能を持たせたい。動物飼育による実験室的な研究と生息地での生態調査の両面から、生理生態、発生などそれら動物の総合的な学術的資料を集積し、保護、増殖などの具

体的施策を立て、いくことも目的の一つである。

現在国内の動物園施設で、日本の動物のすべてを飼育し、展示解説している動物園は全くない。ことに山岳性の動物は殆んど見られず、国民の大多数は書物の上でその動物を知るだけであり、生きた姿を観察し、なまの生活を知る機会は少ない。そこで本園ではこれらの動物の飼育繁殖をはかり、馴化した動物を全国あるいは諸外国



の動物園施設などに広く供給して社会教育の一助としての役割を考えている。次に計画の概要をみると、

**土地** 本館の敷地42,000㎡のうち傾斜20°の斜面の一部に含む平坪傾斜6°の土地約17,000㎡を動物園の敷地とする。

**施設 (1) 外囲** 南北100m,東西170m,の範囲を385mの外囲によって区画する。外囲の高さは平坦面で2m50cm,傾斜面で2mとし,内部各種の山岳性動物を放し飼いにする。観覧者はそれらの動物に直接接することができる施設である。観覧者や他の同居動物に危害を加えるおそれのある動物は外囲内に設けた収容施設で飼育する外囲と30mはなれた本館とはガードによって連絡し,博物館の展示解説と有機的に結びつけ教育的効果を高める

(2) **内部** 観察路を中心に392㎡の人工池をつくり,現存の樹木を整備し,造園計画によって動物の生活環境にマッチした環境にする。観覧者のためには解説板を各所に設け,休憩舎,ベンチなどの諸施設を設けるカモシカ舎を始めとする動物収容舎はすべての動物の繁殖を考慮した施設形態とし,動物病舎,保護舎,管理舎など必要な諸施設は動物園と博物館の総合的な運営の上でもっとも効果的な場所に設ける。

**飼育予定動物**

(1) 放し飼いにする動物

(鳥類) キジ,ヤマドリ,ウズラ  
マゴモ,カルカモ,コガモ,オソドリ  
オナガガモ,ホシハジロ,オオハク  
チョウ,その他の鴨類

(獣類) ノウサギ,リス,ムササ  
ビ,モモンガ,ヤマネ,シカ

(2) 収容舎で飼育する動物

(鳥類) イスワシ,ノスリ,トビ  
フクロウなど猛禽類,ウツ,マヒワ  
などの鳴禽類

(獣類) イタチ,ヤマイタチ,キ  
ツネ,アナグマ,クマ,サル,イノ  
シシ

(3) その他

将来は昆虫類,ネズミ,モグラ類  
蛭虫類,魚類,両棲類などすべての  
山岳動物を飼育できる施設をする。  
カモシカ,ライチョウは収容舎で増

殖,馴化の後,放し飼いでできるようにする。

創立十周年を記念し  
山岳動物園の新設を

この度,本館では創立十周年を記念して山岳動物園の新設を行うことになりました。こんど計画されている動物園はカモシカの増殖施設を中にとり込んだ特色ある山岳動物園です。ここに示しました案は,外囲全体にブロックの壁を使い,この中に危害を加えるおそれのない種々の動物を放し飼いにし,子ども動物園の性格を兼ねた研究・増殖施設としようというものであります。大方の皆様の意見を聴し,早急により良い成案を得る方針なので皆様方の絶大な御協力をお願い致します。

大町山岳博物館  
動物園計画図



# 山博学芸員の仕事

高橋 秀男

「博物館には6人もの職員がいて毎日何を仕事にしているか」という質問をときどき受ける。ちょうど、この博物館が10年を迎えるきょう、過去をふりかえりつゝこの質問に答えるのも無意味ではあるまい。

学芸員という名称は博物館法及び本館条例によるもので、「博物館に専門的職員として学芸員を置く」とあるしかし大町市の場合、学芸員といっても市役所の職階制の中に与えられたポストではない。学芸員を市役所の中に位置づけるとすれば職名は学芸員が主事、学芸員補が主事補にあたる。

当館の現状を理解していただくために、ありのままの日常館務について記してみたい。

「学芸員は博物館資料の収集、保管、展示、調査研究その他これと関連する事業について専門的事項をつかさどる」のが博物館法による学芸員の本来の職務である。がこれはあくまで理想であって現状は全く異なるから困ってしまう。

しかし、私たちは終始一貫、社会教育という目標に向かって前向きな道を歩んできた。この大きな目標を達成するための方法は実に多彩であり、その年の事業方針や担当者によって変化する。

博物館の日常館務の昭和36年度の分担表を参考までに見ると次のようになる。

**館長** (三沢 徹) **主事** (海川庄一) 企画、渉外、予算執行、スケジュール、博物館協議会、調査員会、出張休暇、事業の総括、PR、公聴活動

**庶務** (平林昭一郎) 月曆、記録、文書、通信、公印、用度、宿日直日誌、来館者受付、レファレンスワーク、案内説明、接待

**会計** (平林昭一郎) 予算出納、給与関係、通信関係会計、旅費、観覧料徴収

**管理** 飼育・造園 (荒井幸直) 飼料調達、飼育、保健清掃、動物園 (荒井)、苑地、館内 (全学芸員) 管財図書 (高橋秀男) 視聴覚器材 (千葉彬司) 営繕、暖房水道、電灯、防火 (平林昭) 展示資料 (高橋) 研究器材 (平林国男) 資料室管理 (部門担当者全員)

**厚生** (平林昭) **施設** 針ノ木自然園分館施設設計 (平林国)、新築動物園設計 (平林国、千葉) 植物園整備 (高橋)、水鳥園設定 (海川) **研究テーマ** カモシカの生態と増殖 (平林国)、ライチョウの生態と増殖 (高橋)、コマクサの生態と保護 (平林国)、北アルプスの植物フロラ (高橋)、龍川谷の気象と雪崩 (海川)、そ

の他全学芸員が個人研究。

**事業** 青少年団体学習活動 (海川)、館内外展示、解説 (千葉)、月刊誌「山と博物館」発行 (千葉)、放送出版、レクリエーション (千葉)

**調査・収集** 登山史資料 (高橋)、視聴覚資料 (千葉)、来館者、市民の要望調査 (海川)、友の会指導と資料の作製 (海川)

**技術** 展示、視聴覚資料製作、映写技術 (全学芸員)

ざっとあげただけでもこの通り、このほか、日宿直、月一回の動物飼育、よそからの派遣申請による出張、特別展、資料の貸出、博物館利用者の応待……など突発的な問題は絶えず起ってくる。館務分担のどれ一つをとっても並大でいなく、多くの予算と人が必要になる。だから博物館活動も、おのづと予算の裏付けのある仕事が優先されることになるわけだ。それでもなお予算のたりないところは我々の労力でカバーしていかねばならない

ある一つの事業を企画すると起案して決裁をとり自分で通知を印刷し配布して実施段階ではこんどは講師に早わかりするという笑えぬような話もある。

学芸員の不足は非常勤職員や嘱託員にたよることが多く、彼らは皆現況をよく知っているの、喜んで勤勞奉仕でやってくれる。まことに気の毒に思うが手当を出す予算さえないのである。

展示室が広いのと設備、器材が乏しいので、特別展や展示替などには徹夜さきで調査員、学芸員の総力を結集して展示におゝわらわを演ずることは恒例にさえなっている。展示内容、方法、場所がきまると、こんどは学芸員は皆技術屋に早わかり、経師屋、ペンキ屋、大工、電気屋、写真屋そして土建屋までやり、泥まみれになりペンキだらけになって働くのである。

調査活動は山が舞台となるので殆んど夏は家にいたためしが無い。「山へ行ける職業なんて幸せだね」なんてよく言われるがとんでもない。何事も進んでやれば面白いものであるが、それにも限界がある。こと登山となるとあらゆる面に消耗もするし、危険にさらされる確率も多いわけだ。みな好きな道故、学芸員は一丸となってあらゆる脳みもファイトで克服して館務をまっとうすることに生き甲斐を感じている。

最後に私たちの不勉強で博物館活動もかたよりがちで多くの利用者に迷惑をかけているが、10周年を機に精心誠意努力してまいりたいと思いますので、何分宜しくご協力のほどをお願い申し上げて筆をおく。

(大町山岳博物館学芸員)

## 博物館の思い出

## と 展 望 (座談会)

## 出席者(イロハ順)

伊東伊三郎	山博協議会委員
石原 守明	〃
羽田 健三	山博嘱記・信大助教授
古川 潔	山博協議会委員
阿部 晋与	〃
三 沢 敏	大町市教育長
広瀬 英吉	山博協議会委員長

## 開館の頃

**司会** 気楽な気持ちでお話しをだしていただきたいと思えます。今年は博物館の創立10周年になる訳であります。昭和26年の11月1日に開館しましたが、それからちょうど一カ月遅れて12月に博物館法が公布されております。そこで創立以来の関係者のみなさんに創設期の思い出やこれからの博物館の展望を語って戴きたいと思えます。

**石原** 創立当時は一部熱意のある方々に、いろいろお骨おりにいただいた訳ですが、実際それを実行に移すと云うことになると大変でした。あの当時の町当局、議会側に見れば、博物館などと云うものは問題外だった。あまりうるさくさわぐから、まあまあ資料の収集費の少しもだしておけと云うのが大方の空気だった訳です。そう云う中で一つの独自の館を持つと云うことは並大底のことではなかった。当時のますしい自治体のあり方から考えても、10万そこそこでしたが、今になって見てあれだけの金を支出したと云うことは、当時の議会としては画期的なことだったと思う。良くあれだけの金をだしたと思っている。私としては特にそんな印象が残っています

**司会** 昭和24年7月の大町町議会でしたね。たしか105,000円……

**石原** そうです。当時私も議員の一人でしたが、それがともかく認めていただいたと云うことで、私共たいへん心強く思った訳ですけれども、博物館が独自の館を持つなどと云うことは出した議会側すら考えていなかった。若い皆さんの熱意の盛り上りによってついに独自の館を持つに至ったと私は考えている。

しかしこの独自の館にしても、中心になっていただいた羽田先生もいらっしゃる訳ですが、羽田先生の構想たるや遠大なもので、もう立派な図面まで用意してですね、毎日のように会社の仕事をしている私のところにおしかけて来るんです。先生に挨拶するには私ももう、ホトホとお手上げの状態だったんです。と云うのは私は議会の内容も良く判っているんで、とても羽田先生のご要望を

生かすなんてことはできそうにないので中間的な意見をだすと、どうも先生はご気嫌が悪くて(笑)先生の応待には私としても一番苦心したような訳です。とに角今まで集められた資料を世に公開して「良くここまで来た」と云う認識の上に立って遂次進むよりしかたないじゃないかと云うことで、先生にも了解点にまで行かなかったけれどもがまんしていただいて進んで来たような訳です。時たまたま富国センイが没落して、その建物が(注旧博物館)町の手に移ったと云うようなことからあの建物を転用して、とりあえず店開きをしようじゃないかと云うのが博物館の発端です。

**羽田** 最初建物は記念館と云う線でもた訳ですが、あれじゃあまりに狭くてね。

**広瀬** あの時を振り返って見ますと当時の議会といたしましても、博物館の設置と云うことにはだいたい反対の人たちも多かった訳であの当時の議長が伊藤さん(伊藤半二氏)でしてね、わしも良く相談されたものです。わしも計画については大部批判したのですが、今になってみると本当に夢のように思えますね。

**羽田** 一番はじめですね、私は博物館を作ろうなんて気は全然なかった。昭和21年の8月に大町南校(現大町高校)に來ましてね、すぐ生物クラブと云うのを作ったんですよ。若い学生連中と一緒に山へなんか行きましてね山岳文化展と云うのを開いたんです。その時に慎三(注現大町市観光課長・羽田氏の実弟)とか川合さんや阿部さんが学校へ見に来てくれた訳、その時にこれを一体どこへしまっておくのかと云われたので、済んだらどこかの棚にでも取めておくと言った訳ですがね、その時阿部さんや慎三たちは公民館運動を一生懸命やっていた時分でねなんとか陣列しておく場所がほしい、そこで博物館を作ろうじゃねえかと云うことになった。それでそのままホッテおいたら慎三たちが石原さんとか伊藤さんをお願いして10万何千と云うものをとって来て見貴金をとって来てやったから仕事進めてくれて云うんですよ。やるか、やるかでゴトゴトしていたら25年の1月にハクチョウが来たんですよ、それで古川さん(元毎日新聞大町通信部)たちがマスコミであおるもんですからね、学校でも外へ出ることを許してくれてね、まあハクチョウが博物館を作る動機となったような訳です。

**石原** 一番基礎になったのは古川さん、阿部さん、羽田さんの3人組ですね。これが一番、それがだんだん強化されて行った訳ですね。

**阿部** 連鎖反応ですね。



羽田 一人や二人じゃないですね、いろいろの人の交互作用と云うか……。

阿部 私たちも兵隊から帰って来て内山慎三さんとか、川合幸治さんとかで公民館青年部と云うのを作った訳です。で公民館の本館の中には公民館郷土部と云うのがあって、郷土部を中心にして二つの事業をとり上げてやろうと云うことになった。その一つが博物館建設運動です。これは羽田先生たちの学習グループに刺激されてはじまったのですが、たまたま一志茂樹先生が来て「郷土文化」について講演された時、この町の持っている自然の宝庫を残さなければならぬ、そのためには博物館が一番良いと云われた言葉にえらく感激しましてね。博物館建設運動の方は町当局と議会の方の理解を求めなければならぬと云うことで、私たちは3つのグループに別けた訳です。羽田先生を中心とする学術グループ、これは博物館建設のための基礎資料を収集していただくことで一つは石原、伊東、広瀬、奥原さんたちを中心としたグループで政治工作をやってくれと云うことにした。もう一つのグループはわれわれで、世論を喚起しようと内山さんたちと町角に立って街頭演説会を徹底的にやりました。

どの町会議員が反対でどの町会議員が賛成かと云う、ブラックリストを作って町議会の傍聴から、町議の個別訪問までやりました。

傍聴席からヤジつてしまつてね、今ならツマミだされてしまうがね、賛成意見がでると「ソウダ、ソウダ」反対意見がでると「ソウジャネエ、ソレジャイケネエ」……集中攻撃をやつたね、博物館ができたのは、はっきり云えばすべての人たちの善意の賜だと思ふ。町長も又議会の人たちも話せば判る人たちで、今のように博物館を理解できないまま批判すると云うことはなかった。当時の10万円は今で云えば莫大な金だ、建設までに2・300万はかかっている。これも理事者側の暖たたい好意と市民の協力と云うものが非常に大きかったと思ふ。

伊東 市が赤字財政になって来ると消費の面の大きいところはどうしても弱い。その面で私も困つたですわ。その点についてどのように了解を求めれば良いか、博物館が必要なことは皆ご承知ですわ。その利益が少ないとか収入が少ないとか云われてしまったら公民館にしる博物館にしる教育が成り立っていかんですわ。

## 動物のこと

石原 駅前ハクチョウ舎を作つた時に町民の住宅さえないのに鳥の家を作るとは何事だと云う人がいた。しかし今見るとあの前に人が絶えたことがない。大町の玄関にあって大町を訪れた人や市民がどの位心を暖たためられたか判らない。

三沢 そのオオハクチョウも一世がなくなって二世が入っているが、あれは本当に人の心を暖たためる。

石原 昭和25年にクマをもらいに奥原さんと2人で、有明まで行ったが、当時はまだ家族と一緒に寝起きしててね、俺たちが行ったらノコノコと家の中からはい出して来て、自転車のハンドルを動かしていたのが、今ではあんなに大きくなっている。

伊東 クマのことで思い出したが、博物館の動物の予算審議の時、うんと削つたことがあった。そんなに削りや動物のエサが半年しかもたない、半年で死んでしまうようでは困ると又元通りにしてもらつたことがあった。

## 博物館の展望

司会 今までは博物館の思いについて語っていただきましたがこれからの博物館についてお話ししたいと思ひます。

阿部 この10年の歩みの中である意味では国際的な評価さえ生れて来つつあるのに何故地財法の適用を受けると同時に一部ではあるけれども批判を受けたか、之はPR不足だと云うことが云えると思ふ。花やかな面ばかり追いついて館内の整備とか、事務処理・資料整理とか、いろいろな地道な問題の方へ手が廻らなかつたと云うことと同時に一番大事な議会工作に欠けたうらみもあると思ふ。この際10才になって大人になった博物館に対してそれを望みたい。大人になった博物館はただガムジャラに行つただけでは、どうにもならないし、もっと堅実な落ちついた方法を見つけて行かなければならぬと思ふ。こう云う点を反省して今後の博物館の飛躍にそなえてほしい

羽田 今までチーム・ワークで来たんだが、この博物館はチーム・ワークがうまく行かなければならぬと思ふ。ただお役所仕事で管理一方ではジリ貧になるだけだ、どこまでも市民全体で作り上げて行くと思ふ。世論をまき起さなければいけないと思ふ。針ノ木自然国という問題も出て来るがこれも創設期からの世話になった人と手を握り合つて最後のまとめをしなければいけない、絶対に1人や2人でできる仕事じゃないね……。

阿部 私はこの10年の間に3つの節があったと思ふ。一つは開館当時の節、それに2つ目は移転新築の時の節、3つ目は地財法を受けたときの博物館に対する大きな批判これ等の節を乗り越えて来たんだから、十一年目からは成人式を終えて青年時代に入るんだ、こんごの10年は一番大切なときと思ふ。

石原 博物館友の会などで学校とのつながりを深め、ますます博物館を拡大して行くと思ふ方向をとらなければならぬし、地域の山岳団体、学校の山岳部、又地域の山岳団体だけにとどまらず、全国の山岳団体とのつながりを密にして進んで行くべきじゃないかと思ふ。それか

ら針ノ木自然園と云う問題も出たんですが、これも博物館だけと云う域を出た大きい問題だと思う、黒部開放を2年後に迎え、大町市としても非常に大きくとり上げて真剣に実現にまい進すべき問題じゃないかと思う。一日も早く軌道に乗せて黒部がクローズアップされる日に遅れないようにして行かなければいけないと思う。

**古川** 学芸員の組織はできているが経営的な手腕がたりないからバラバラになってしまっている、もっと研究すべきだ。信越ブロックの博物館大衆などにもでて、他の博物館経営なども聞いて来て、こちらにも良いところは持ち込むようにしなければいけないと思う。大会出席の旅費もないというのが実情だが……。

**広瀬** 教育の立場だけでなく観光の立場からも予算を盛って行かなければならない、道は観光道路としてやるのか、公園は都市公園としてやるべきだ。

**阿部** 御前沢、宇奈月地区など例の弥陀ヶ原地籍みんな富山に取られてしまっている。それを博物館の基本的なデータのためにまきかえしをしたんですよ、それで今では富山とタイのものになったんですよ、しかもルートを押えているだけにずっと大町の方が有利なんです。そう云う点で私は、博物館は広瀬委員長の云われるように議会なり市民の前に学術研究とともに発表して行かなければいかんと思うんですよ。

**古川** 学術研究と云っても予算は一銭もない維持費だけでも足を出すのに、それをやりくりしたり、県から助成金をもらったりして、ただこちらが苦心して生態調査をやっているだけだから、こう云う点も皆さんに理解していただきたい。

**伊東** 動物のエヅケをやると云うことは、簡単に見るとですね、ムダなことをしているように見えるんですね、そう云った研究が組み込まれて自然園の段階に来ているんだ、そう云う功績はちょっと判らなくてね、目先ばかり見ている感がある。

**阿部** 調査には市費から一銭もでていませんね。

**羽田** 郡誌の方は今まで何年か知らないが、600万円位はできていると思うんですよ、我々の針ノ木は10万で1年たらずでやってしまう。今の調査だって旅費実費だけしか支給していないんですよ、これは市民のための仕事としてお願いすると云うようにしてもらわないと、個人研究じゃ無理なんですよ。

**伊東** この間議会で広瀬議員はウマイことを云ったぞ。第一中学校の本の問題がでたときに博物館の予算を削れと云うような人があってね、広瀬議員、カンカンになって怒ったね。

**広瀬** 第二中学校には本があるが第一中学校にや本がなくていけない、金は博物館の予算を削れと云うもので、本

を山のように積んで、博士や大臣が出るなら書籍屋に行けばなれる、本は読んで研究してはじめて良いのだと、なぜ山博を削るんだと、削る例を云うにも山博と云うのはけしからん他にたとえようもあるものだ……



### 10周年記念 事業

**阿部** 針ノ木自然園の構想は10年を記念しておそらく、おおずめに来たいと思う。

黒部解放後200万~300万のお客が来ることは将来確実だが、その場合一番心配されるのは、この美しい大町の自然と云うものが必ず荒らされるんだと、その場合予防したり、保護するのが博物館の使命だと思う。

**石原** 山岳県とうたっている県も又余りにも山岳博物館に対して少し冷淡すぎる、県がもっと支援する段階に持って行かなければいけない。

**三沢** 旧館跡に残っている動物園の移転は、だいたい600万位かかる訳だ、助役にも話したが二期にやってくれるとのことだ。創立10周年記念事業として免も角実現の見通しのついたことは喜ばしい。

**阿部** 動物園を本館近くに移すことは市民とのつながりを深める意味で欠くべからざる仕事だ。学術研究を併行させ本館の周辺を整備し、動物もふやして市民の憩いの場所に仕上げて行くと云う配慮はいろいろの意味で大切なことだと思う。

**司会** いろいろと創設期の想いでや、これからの展望などお話しいただきありがとうございます。



# 10年の歩みに寄せて

## 山博に寄せて

幡野茂道

昭和26年11月1日大町(町)の理事者、議会、有識者の熱意に依って生まれた全国で只一つの山岳博物館が10年の星霜を閲してここに祝典をもつと言う。往時を追憶し感無量のものがある。その頃、大町は末だ町であったこの町には山を愛し山とともに生きた多くの先覚者を持っていた。山を想えば人恋し、人を想えば山恋し、山を愛すことは、郷土への愛であろう。思えば、大町には、必然的な山への伝統があり愛情があった。山博の創設もここから出発した当然のことでもあったろう。

然し当時の大町でこの山岳博物館の設立を見た事は、それが合併前であるだけに、偉大な業績と申す外はあるまい。今此処に開館10周年に際し設立の労をとられた、先覚者諸氏に謹んで絶大なる敬意を表するものである。今我々がこの大町市山岳博物館の前庭に立てば、視界に展開する雄大な後立山連峯の山なみに思いをのむのである。右より白馬三山に発し左端のつばくろに至るその連峯の偉容、そしてそのふもとに展開する山の都大町市、誰しもが等しく感嘆の声を上げるこの景観の中に大町市民の郷土への愛情が吸みとれるのである。その事は又山岳博物館設立への愛情につながるものであろう。今世界は原子科学万能とも言える現実の中に在る。然し今我々はその事とは別に自然科学の持つ人類との関係を深く意識しなければなるまい。世界が宇宙への関心に狂奔する時皮肉なことに、まだ人類は地球の内部の事が良く判らないのである。今郷土愛の結晶として設立された、この山岳博物館がこの意味に於いて果す役割は将来大なるものがあると思われる。日本アルプスは至る所自然科学の宝庫であらう。地学を通じ、生物学を通じアルプスの千古のとびらを開いてほしい。幸にも博物館は、設立当初より親身の指導に当たられた鶴田先生、福岡先生、地元の羽田先生、そして理解深い理事者、市議会、その上學究の情熱に燃える若き館員を持っている。我々は全く目立たないコツコツとつみ上げる調査研究こそ今後の山博の大なる成果への里程であらうと思う。そして又自然究明の情熱は、深い郷土愛より出で又それに依り更に研え続けるであろう事を心から祈り期待するものである。今後、立山の山なみに新雪が輝き、麓の山々は錦を帯びて大町山岳博物館に無言の祝意を表するかに見える。私は大町市のシンボルとしての山岳博物館の前途に心からなる期待と祝意を併せ表すものである。終りに山岳博物館成立の功労者諸氏に深く感謝を捧げるものである。

(大町市教育委員長)

## 10周年を記念して

平林泰雄

大町市立山岳博物館が10周年を迎えたことに対し心よりお祝いを申上げるものであります。

当時の青年諸君の熱意とこれが実現に踏切った松田町長、町議会の先輩諸兄の英断に対し深湛なる敬意と感謝を捧げるものであります。

創成期の10年間の歩みは茨の道であったでしょう。関係者の血のにじむ様な努力の結果今日世界でも例のない博物館として山岳都市大町のシンボルとして燦然として輝き始めんとして参りましたことは御同慶の到りであります。

しかし内容充実に力を注がなければならない重大な時期に大町市の財政困窮のため思うにまかせぬことは誠に遺憾であります。昔から文化は国の象徴であると云われて居ります。

ローマ帝国の発展なくしてローマ文化はありえなかつたでしょう。

アメリカ文明もソ連の科学文明も共に各々その国の資本主義経済、社会主義経済発展の賜として現在の世界人類に驚異の眼をみはらせていることは周知の事実であります。

市立博物館である以上は市財政と切り離して考える訳にはいかないでしょう。

文化と経済は不可分であることを再認識せられ大町市発展なくして大町山岳博物館の発展は期し得られないと思うのであります。

将来大町市が国際的観光都市として発展して参りますには博物館の存在は如何に貴重なものであるかはなにも認める処でありまして市当局も市議会もより一層充実した博物館にすべく非常に苦しい財政状態の中から出来得る限りの予算を計上していることは御理解願ひ僅少な予算で誠に運営至難であり内容充実に困難があると思われまますが共々に市財政の立て直しにご協力願ひ一日も早く健全財政確立の上に立って将来の大発展に備え更にたゆまざるご努力を続けていただきますことを御願ひ致しまして筆を止めます。

(大町市議会議長)

## 思うこと

伊東 伊三郎

大町山岳博物館が設立せられて早くも10周年を迎えた事は感激ひとしお深いものがあります。東山公園台上新館を仰ぐ時よくここまで漕ぎつけたものだ。市理事者関係方々の計り知れない努力と郷土愛に燃える尊い結晶であります。過去10年の歩みは地方博物館の運営が何如に困難な事であるかをつくづく感じるものであり苦斗の連続である。こうした中に於いて針ノ木岳の発刊、針ノ木自然園の構想の元に学術的調査、山の自然科学教室の充実等の業績は地方文化山岳観光面に寄興する処であります。今春皇太子殿下、高松宮殿下御夫妻秩父宮妃殿下の御来館を仰ぎました事は山博のみならず大町市の名誉であり誇りであります。

山博は生れて未だ10才の子供である。今後そだてなければならぬ事は沢山あると思うが先ず市民の憩いの場として、又、来館者の増加をはかる意味に於いて先づの動物の移転、造園計画の実施等は是非実施してほしいものであります。一方山博の運営面に於いても企業的な考え方も加えて研究してもらいたい。

大町市は雄大な美しい北アルプスのフトコロにあり天真の風景により物心両面に於いて限りない恩恵を受けているが、更に秘境黒部峡谷の観光開発により、一増観光都市として全国的に観光をあびることでしよう。此の事業も1.2年にせまっています。山博として調査研究の自然園の構想も観光事業の面に大きな役割をはたすことでしよう。此れこそ夢の実現であり山博の前途益々洋々たるものがあると存じます。(山博協議会委員)

## 山博の新しい任務

阿部 酉与

博物館が生まれて10年になったが、これはいまの神楽町に昭和26年11月1日に開館してからのことであって、昭和22年に公民館郷土部がこの博物館建設の母体として発足して、陣痛の苦しみをした4年間の準備期間も入れれば、14年来のむかしのことになる。

いま私はここで過去の追憶や感傷にはふけりたくない。なぜならそれらについては既に「大町山岳博物館建設記録・1957.7.20、大町市教育委員会」や「山と博物館・第6巻・第1号・博物館を支える新しい力に期待する」に述べておいたからである。

この光輝ある大町山岳博物館が10年の歴史と伝統を持つようになったことについて、いま私たちがこの偉大な文化遺産を愛する大町市民や、全国の自然と山を愛する知己から与えられた任務は、単なる過去の追憶や感傷でなしに「これからの博物館はなにをなすべきか」とい

う将来への命題であろう。

10才の誕生日を迎えようとする前年の「博物館はもうからないからアパートにしる」というごく一部の市会議員の意見を、私たちが気がかけないようになったのも市民の与論が自信を与え、全国の多くの人たちからの激励をいただいたためだと思っている。

この博物館はもはや中傷や、間違った理論では左右することができなくなったほど堅実に成長してくれたのである。

「秘境・黒部」の観光開発と相まって「針ノ木自然園」の建設は、これからの将来にこの博物館が負わされた任務である。

換言すればこの10年間「消費」を続けてきた博物館が精神的、経済的な面から「生産」へと転化するエポックとなるのである。

「針ノ木自然園」が夢物語だと独断する人たちは、14年前、博物館のこんにちの姿を予測し得なかった人のあやまちをふたたびくり返すことになるのである。

(前市教育委員)

## 省りみて

古川 潔

博物館は10年を迎えた。囑託主事館長代理などつとめたせい、博物館の悪口を聞くと無性に腹が立つ。身うちの気がしているのかも知れない。願いはすくすく伸びることのみ。

さき頃座談会で元町議石原守明さんが創立当時の町議会の空気を話されたが、あまり熱心だから10万円位出せば静かになるだろう、位の気持の支出が本日の結果を招いたものでヒョウタンから駒式のものだった。

好意的批判や助言が積み重なって旧富国織維工場跡建物へ独立館が発足する前夜は張り切った部外協力者が徹夜で開館準備をするなど熱の入れ方はたいしたものだった。勿論金銭的報酬も飲食代もでなかった。こうした協力が今日まで続いて兎に角天下にその名を知らしめることになったのはご同慶に絶えない。信大教育学部の羽田健三さんを中心に行っていることにはかわりはないが、現法大講師福岡孝行さんにもお世話になっている。当時自然科学は羽田さんが一手に引き受けられていたが山岳関係に適任者をという訳で、白羽の矢は山岳・スキーの権威又外国の博物館に通ずる福岡さんに立てて、当時の町議石原・宮田清・伊東伊三郎さん助役の宮崎さん伊藤喜美さんや小生の一行が同氏宅を訪れて懇請承諾を得た。帰途秩父・日光阿博物館東大付属植物園など視察して、入館料による維持費の捻出など経営面もさんさん研究、この面さえ解決すればと意気込んだ事もあった。

県外から博物館を視察にきた人はよくこんな言葉で大



町市をほめていた『市役所の庁舎はボロだけれど、学校博物館、公民館などの施設は実に立派である。これは関係者の深い理解と協力によるものだ』と。昭和電工、呉羽紡績の二大工場、関西電力など生き生きした活況のなかに、これとは別の空気である学究的な存在の博物館は異様に感ずるのかも知れない。とにかく外来人の眼に映じたように市民の一人一人が深い関心と理解を寄せられることを期待したい。(山博囑託)

## 10周年に寄せて

広瀬英吉

大町山岳博物館が開館10周年を迎え、茲に盛大なる記念行事の行なわれる事は不肖市議会の末席を汚し当博物館の運営に微力を尽して来た一人として誠に欣快に堪えない次第であります。顧り見ますれば、当市は、元来豊かな大自然に恵まれ、溪谷の美川の清き詩情あふるる湖あり雄大な北ア連峯を背にする日本一の山の都として高き誇りを抱いて参ったのでありますが、この恵まれた環境の中に昭和26年各位の宿願が叶って山都大町にふさわしい山岳博物館開設の運びを見たのであります。以来市勢の進展に伴い庁舎の狭あいと其の地理的偏在より来る一切の不便を除去すべく東山公園に改築移転の議起るや、理事者、議会、地方有志の絶大なる援助に依り庁舎計画成り遂に堂々たる庁舎の新装を見るに至り、今その詰構を見る雄大にして堅牢外廓また壮麗を極め内容設備ごとく斬新なるのみならず採光、通風に遺憾なく、資料研究内容の充実に伴って、来館客も年々増加。本年は皇太子殿下の御来館を仰ぎ又東京、大阪方面からの研究生や視察客で多忙を極めた程でございます、今月第6巻11号を迎えました「山と博物館」と共に日本の津々浦々まで知れわたるに至りました。

一昨年来当市の苦しい財政面から一時は場から前途を憂慮されるにさえ及んだのでありますが、幸にして賢明なる市当局及市民の覚醒に依り非運を未然に防ぎ得て旧時の盛名を快復するに止まらず今や縦横の活気を呈して居ります。市財政状態も著しく改善されるに至りました。在来の教育施設の充実に加えて高等教育機関の新設は文化都市として一段の光彩を添ました。其の他市民会館の完成で初めて衛生設備の改善、道路、消防の整備等近代都市として内容、外観共に面目を一新するに至りました。8年前市制施行当初と思い合せて誠に隔世の感に打たれます。大局より見ますれば基礎わずかに固り発展の緒に就いたに過ぎません。真の繁栄は将来に囑望すべきであります。大町博物館も10周年を記念しまして益々意義あらしむべく今日を一画期として更に立派なものに実現致したく、我々市政にたずさわる者も及ばず乍ら努力を続けて参る所存であり、関係御一同に於かれましては御指導と御支援をお願いします。(山博協議会委員長)

## 発足の思い出

奥原一登

長い議員生活の中で市政面、種々な想出ではあるが発足当初公民館活動の中で山博創設に関係した一人として山博に就いてはつきせぬ想出がある。私が平林公民館運営委員長の後を引継いだ頃公民館運動の中心になっていた青年部の諸君から博物館設置案が持ち出され運営委員会の方は無事承認されたが、却て、議案として議会を通過させ予算化する迄には、そうた易い事ではなかった。

青年部より出された請願書の紹介議員として説明役に引張り出された、議会では幸にも同僚議員の現市会副議長伊東さん、当時の町議石原、宮田、中村さん、故人となった内山政重さんなどの援助で陳情書は採択されたが、理事者側が果してこれを予算化して実現するかどうか？

そこで時の助役中村虎一氏を訪ねて、青年部諸君の睿智に基く必要性を大いに力説し予算措置を講じて早く議会へ出して貰うべく懇請し掠承も得て帰った。処が招集された議会に提案されていない事を青年部諸君より指摘され大あわてで再度理事者へ厳談に及んだところが次の議会までにはなんとかするから待ってくれと云う次第でなかなかはかどらない。多少横車とは思ったが若し今議会に予算化しない様なら「予算案に全面的に反対するぞ」と迄言い放って帰った。今から考えると時の理事者に対して汗顔の至りではあるが兎に角こう迄して、公民館予算の中に博物館費と云うものが顔を出して博物館発足の緒に就いた事は当時の関係者として嬉しかった。

予算審議に当って一部議員より博物館などは金ばかり喰って観覧料位で今後の維持管理など出来るものではない青年部の若い連中におだてられてこんな事を初めると財政面で将来悔を残すぞと迄の反対にあった。

駅前白鳥禽舎は今では市民や大町を訪れる人達に親しまれて、なくてはならないものになっているがあの計画を進めるに就いても住宅不足の折柄町営住宅も建てられぬと言うのに一羽の白鳥のために何万もかけて禽舎を造るとは何事だと市民の一部より手痛く叱られた事など思い合せて、今でも表現の仕方は違っても同型の批判のある事は事実だ。山博創設当初より委員としてお骨折を願っている羽田先生や石原さん阿部さん長沢さんなどにはほんとに頭の下がる思いだ。御陰で、外来者の訪れる会合などで市内視察と云えば先づ山博へと云う事になる、皇太子御来訪に依るばかりでなく全国的に知られて来た山岳博物館だ。将来県立又は国立へ移営される可能性も多分にあると云うものだ。然し見方に依れば、漸く10才を迎えた幼児でもある。今後の成長を楽しみに市民皆さんの理解と愛情の中に育てて貰いたいと、10周年に当って念じている。(山博協議会委員)

# 博物館のすがた

## (1) 施設

イ、所在地 長野県大町市大字大町8058番地桶沢  
 ロ、敷地面積 10,500坪  
 ハ、建物 本館1棟(2階建)木造延372坪  
 ニ、展示室 中央ホール(中部山岳国立公園25,000分の1の模型)郷土室(大町市の模型ほか)生物室、地学室、山岳室(生態陳列)、山岳室(登山史、登山用具の変遷など)、階上ホール(カモシカ、登山技術など)  
 ホ、小講堂(映写施設完備、20坪)  
 ヘ、研究室(資料室と兼ねる、40坪)

ト、事務室(10坪)  
 チ、会議室(図書室と兼ねる、10坪)  
 リ、宿泊室(博物館利用者の無料宿泊所、宿泊設備なし12坪)  
 ス、宿直室(4坪)  
 ル、食堂(設備なし、4坪)  
 オ、炊事室(4坪)  
 ヲ、便所(4坪)  
 カ、附属動物園(昭和36年11月1日現在、旧博物館跡にあり、昭和37年度において移転の予定、動物舎、木造10棟延15,5坪、鉄筋コンクリート4棟延21坪)

## 歳出予算

年度	当初予算額	追加更正予算額	合計
26	552,180	1,671,188	2,223,368
27	998,530	691,500	1,690,030
28	1,888,743	—	1,888,743
29	1,585,874	—	1,585,874
30	1,959,000	150,000	2,109,000
31	2,095,000	3,640,000	5,735,000
32	4,957,000	46,000	4,911,000
33	4,428,000	260,000	4,688,000
34	3,238,000	76,000	3,314,000
35	2,628,000	165,000	2,793,000
36	2,846,000	361,000	3,207,000

## 10年間の観覧者及び観覧料一覧

昭和26年度	観覧者	観覧料
27	13,201	35,303
28	18,696	109,813
29	13,451	95,512
30	15,193	90,205
31	11,888	69,075
32	11,099	107,020
33	13,293	104,020
34	12,588	100,545
35	14,262	121,295
36	8,737	114,405(9月現在)

[注] 観覧者は大人、小人、招待(無料入場者も含む)の総合計である

## 国庫補助金

年度	金額	備考
昭和26年度	0	設備費
27	211,000	"
28	241,000	"
29	141,000	"
30	169,000	"
31	300,000	施設費
31	64,800	設備費
32	285,000	"
33	40,000	"
34	144,000	"
35	100,000	"
36	未定	

職員在職状況

36.11.1 現在

Main table containing staff names, dates of employment, and a grid of bars representing their tenure from 1925 to 1936. Includes roles like '学芸員' and '市吏員'.

本採用職員
臨時職員
嘱託
調査員に相当するもの

山岳博物館の非常勤職員

顧問 福河考行 (法政大学) 沼田 真 (千葉大学)
嘱託 羽田健三 (信州大学) 古川 潔 (大町中原町)
嘱託学芸員 福島 融 (北福島商店) 中村武久 (東京農大付属高校) 倉田 稔 (大町市第一中学校)
調査員 (昭和36年度) 手塚映男, 丸山 晃, 長沢 武興, 水太伸, 長沢修介, 山本携拳, 竹内剛久, 柳沢幸治,

松沢宗洋, 北沢昭一郎, 武田睦男, 久保田稔, 北原和好, 太田忠雄, 武田弘樹, 伊藤 弘, 小林吉男, 北沢 保, 飯沢茂男, 坂田高男, 戸谷昭寛, 平林 東, 大倉多助, 古畑志げ子, 伊東 昇, 宮田嘉文, 井出 寧, 岸田平吉, 曾根原治宏, 柴山第三郎, 松山教, 森 義直, 小松忠清, 足助治男

## 昭和26年より36年までの協議会委員

## (設立準備委員)

下川高次郎 宮崎文雄 平林紫郎 奥原一登 大日向寅三 川井幸治 中村軍平 福島うめ 古川 潔 藤崎  
宜夫 平林武夫 松井達夫 丸山 彰 長沢欽平 羽田健三 平林照雄 荒井昇一 内山慎三

## (協議会委員) ( )内は在任年

古川 潔(26~29) 大沢徳実(26) 阿部詔与(26,36) 羽田健三(26) 内山慎三(26,28~30) 坂井  
行信(26,32~36) 宮尾光雄(26) 高橋銚吾(26,32~33) 長沢欽平(26,31~36) 島田兄一(26~27)  
伊東伊三郎(26~28,30~35) 大日向志郎(26,34~35) 石原守明(26~36) 内山正重(26) 宮田 清(26~27)  
丸山 彰(26) 工藤久雄(26) 奥原一登(26,36) 大日向寅三(26) 下川高次郎(27~33)  
平林喜代美(26) 相沢誠二(27~29) 宮原勝芳(26) 矢口 享(27~29) 丸山安一郎(26) 太田裕司  
(27) 荒井昇一(27) 諏訪敏夫(29) 武井 勇(27~28,34~36) 伊藤半二(30~33) 中村軍平(27  
~31) 薄井脩介(30) 曾根原武士(27~29) 遠藤恒春(30~31) 荒井房次(27~28) 桜井 順(30~  
31) 田巻元美(27~29,32~33) 高橋恭男(30~33) 若菜忠義(28) 西沢永市(30~31) 竹村義雄(28)  
原田 曠(30) 山崎房雄(28) 幡野茂道(30) 太田沢治(29) 平林忠雄(30~31) 河崎好正(29~30)  
松田吉辰(30~32,34~35) 鎌倉光夫(29) 宮田文夫(30) 栗林英策(29~30) 村井直人(30~33)  
腰原正克(29) 横沢庄司(30~33) 中村訓夫(31) 宮坂鷹太郎(33) 中村周一郎(31) 平  
林武夫(34~36) 平林はるゑ(31,35~36) 竹内剛久(34) 小野 彰(31) 石曾根孝子(34) 中山政  
市(31) 田中保平(34~36) 大庭義郎(31) 平林泰雄(34) 荒井 裕(32~33) 藤巻義忠(34~35)  
片瀬恒喜(32~33) 伝刀成茂(34~36) 窪寺吉昇(32~33) 曾根原義郎(34~36) 清水千春(32~33)  
伊藤貞雄(34~35) 中島清一(32) 古原和美(34~36) 原 又雄(32~33) 日下部秋義(34) 横川安  
雄(32~33) 小日向重利(34~35) 小林 博(33~34) 武田 武(35~36) 相模三蔵(35) 菅沢六海  
(35~36) 佐藤鎮夫(35~36) 大倉一雄(36) 平林宗兵衛(36) 広瀬英吉(36) 田中 操(36)

## 博物館備品

1, 収蔵用具 資料戸棚(14), 植物標本ダンス(5), 昆虫標本箱(61), 昆虫標本箱ケース, 鳥卵標本箱(2), 岩石標本保存箱(36), プレバカート保存箱, 原材料保存棚

2, 視聴覚器材 アサヒフレックス, アサヒペンタックス135mm望遠レンズ, 500mm望遠レンズ, 接写リング, 電気露出計, フィルター(6), 顕微鏡アダプター, 三脚, 顕微鏡, 接眼マイクロメーター, 解剖顕微鏡, 幻灯機, レコード(4), 拡声器, 映写幕, マイクロフォン, 暗幕(8), 映写台, 双眼鏡, 望遠鏡, 16mm映写機, (エルモ)16mm顕影機(ベルハウエル), デジケーター, 電気スタンド, テープレコーダー

3, 造園, 飼育用具 上皿自動計量器, 飼育台, 動物飼料箱(3), ジョレン(3), イシホリ(3), スコップ(6), クワ(5), クサカキ(2), 動物運搬箱(1)

4, 野外出動用具 石油コンロ(スベア2, ラジューズ1), マップケース(6), カーバイトランプ(3), グランドシート(3), アイゼン(4本歯6, 8本歯1, 10本歯3), 天幕(夏天3, 冬天1), 飯盆(3), エアーマット(3), シュラーフ(20), テントフライ(1), ランタン(3), ザイル(2), シール(1), ビッケル(2), コップエル(3), アイスバイル, アブミ, カラビナ(5)

5, 収集研究用具 研究机, 曲尺(5), ペンチ(3), カナヅチ(3), カンナ(2), クギスキ(2),

ノコギリ(8), 木工器具セット, (20点入), 水槽, 展翅板(10), 解剖器(3), 三角銅丸(7), 高枝切鋏, 木鋏(4), 銅丸(10), たもあみ, 皮切包丁(4), クリノメーター(2), ハンドレベル(1), 百葉箱(2), 自記雨量計, 気圧計(3), 風向風力計(3), アスマン乾湿計(2) 自記温度計, 自記気圧計, 自記湿度計, 照度計, 乾湿計(2), 丁定規(3) カウンター(4), 上皿天秤, ノギス, 標本瓶入箱(4) 植物標本乾燥器, 器材戸棚(2), 鉛銃

6, 参考図書室備品 図書戸棚(3), 蔵書(1,226)

7, 展示用具 ウォルケース(20), ピアノ式ウォルケース(15), センターケース(2), 模型地図ケース 山岳模型地図台, 写真展示額(36), 陳列台(19), 資料陳列用ツイ立(2), 植物展示用ツイ立(7), 資料置台(4), 昆虫標本陳列台(6) 植物展示用縁縁(61), 展示幕(3), 館内案内図板(1)

8, 一般館具 事務戸棚(2), 平机(5), 事務椅子(10), 片袖机(7), カッター, 消火ホース(2) ナンバーリング(2), 帳簿立(7), 謄写器, 館長印館印, 毛布(2), 座布団(5), 宿直用フトン(7) 釜(2), ナベ(5), 食器戸棚, 調理台, カマド, 電気コンロ, 無人スタンド, 折たたみ式椅子(25), 黒板(6), 蛍光灯(40), 下駄箱(3), 会議用椅子(30), 長机(7), 丸テーブル(1), 長壁掛(11), ストープ(4), 消火器(5), 自転車, 時計(3), 電話(3), 博物館旗, 書庫,



## (5) 資料

生物部門	
○動物	7,986点
(イ)哺乳類(カモシカ, サル, クマなど)	2,068点
(ロ)鳥類(ホシガラス, ライチヨウなど)	120点
(ハ)魚類(イワナ, ニジマスなど)	482点
(ニ)両棲類(モリアオガエル, 他)	51点
(ホ)爬虫類(シマヘビ, カナヘビなど)	50点
(ヘ)昆虫類(クモマツマキチヨウなど)	42点
(ト)甲殻類(サワガニなど)	1,021点
(チ)両棲類発生標本	12点
(リ)鳥類卵標本	132点
○植物	158点
(イ)顕花植物(高山植物など)	5,918点
(ロ)隠花植物	4,315点
(ハ)菌類	1,521点
	82点
地学部門	
(イ)化石, 鉱物	578点
(ロ)岩石(変成岩, 水成岩)	115点
(ハ)岩石プレパラート	347点
(ニ)地質図及び針ノ木岳雪溪調査表など	80点
	36点
気象部門	
(イ)山岳定期同時観測表(針ノ木・大町)	530点
(ロ)北アルプス主要山頂同時観測表	131点
(ハ)鹿島岳気象表	81点
(ニ)剣岳気象表	40点
(ホ)北安曇郡各地点気象表	62点
(ヘ)山岳気象展示グラフ	134点
	63点
山岳部門	
(イ)山岳写真	425点
(ロ)登山用具	105点
(ハ)大町市模型	52点
(ニ)中部山岳2,5000分の1模型	1点
(ホ)スキー図板(スキー用具の変遷など)	1点
(ヘ)古代復元石膏品	46点
(ト)古代スキー復元模型(北欧の出土品)	3点
(チ)スキー(明治時代のものなど)	11点
	8点

## 編集後記

「山と博物館」も発刊以来通算70号を数え、今回は10周年を記念して特集号を編集いたしました。博物館と共に歩きつづけて来た「山と博」も何回となく廃刊の危機にさらされましたが、そのつど関係各位の暖かい御支援により現在まで持ちこたえて参りました。当博物館唯一の月刊印刷物である「山と博」は発行され

(イ)登山風俗資料(案内人, 初期の登山者の服装等)	80点
(ロ)登山技術図板	80点
(ハ)ナイロンザイル関係	25点
(ニ)テント模型など	13点

## 歴史民俗部門

古文書(大町市政関係古文書など)	2,162点
仏像	646点
考古(上原遺跡出土品は含まない)	2点
民具(雪具, 農耕, 信仰など)	1,311点
	203点

## 付属動物園飼育動物

○※哺乳類 8種	49点
アナグマ	12体
キツネ	2体
サル	雌 1体
テン	雄 1体
ツキノワグマ	雄 1体
リス	2体
ホンシウモモンガ	2体
カモシカ(岳子)	1体
○※鳥類 14種	32体
イスワシ	2体
サシバ	1体
トビ	3体
ノスリ	4体
フクロウ	5体
キジ	2体
キジバト	2体
ハシボソガラス	1体
オオハクチヨウ	雌 1体
カルカモ	4体
オシドリ	雄 1体
ホシハジロ	雄 4体
コガモ	雌 1体
オナガガモ	雌 1体
○…爬虫類 1種	5体
イシガメ	5体
○大町山岳博物館収蔵資料総計	11,730点

て行かなければなりません、今后とも皆様方の絶大なる御支援、御協力をお願い申し上げます。

発行に当り犬馬の労をとられた、毎日新聞大町通信部 田中保平氏、大町市観光課長 内山慎三氏、編集部が無理を心よく引き受けくださった信州印刷社長宇佐美吉秀氏、表紙印刷に御支援いただいた、実業の日本社 横山元昭氏に深く感謝いたします。(千葉記)

# 祝 山岳博物館10周年

<p>大 町 営 林 署</p> <p>TEL (代表) 1150</p>	<p>北 安 曇 郡 町 村 会</p> <p>事 務 局 TEL (大町) 320</p>
<p>昭 和 電 工 大 町 工 場</p> <p>工場長 佐 藤 宏 男</p>	<p>吳 羽 紡 績 大 町 工 場</p> <p>工場長 下 岸 宏</p>
<p>東 京 電 力 株 式 会 社</p> <p>松 本 電 力 所</p> <p>TEL (大町) 120 (松本) 563</p>	<p>中 部 電 力 株 式 会 社</p> <p>大 町 営 業 所</p> <p>TEL 9・109</p>
<p>関 西 電 力 株 式 会 社</p> <p>黒部川第四発電所大町建設事務所</p> <p>TEL (代表) 800</p>	<p>松 本 電 気 鉄 道 株 式 会 社</p> <p>大 町 営 業 所</p> <p>TEL 144・806</p>
<p>川 中 島 自 動 車 株 式 会 社</p> <p>大 町 営 業 所</p> <p>TEL 1160</p>	<p>関 電 産 業 株 式 会 社</p> <p>TEL 799</p>
<p>白 馬 観 光 開 発 株 式 会 社</p> <p>白 馬 営 業 所</p> <p>TEL (白馬) 117</p>	<p>大 町 市 観 光 協 会</p> <p>大町駅前 TEL 190</p>
<p>木 崎 観 光 協 会</p> <p>TEL 790</p>	<p>長野県北安曇郡白馬村</p> <p>白 馬 観 光 連 盟</p> <p>TEL (白馬) 1・57・139</p>

# 祝 山岳博物館10周年

## 相模不動産株式会社

商事部 相模冷蔵株式会社

株式会社 さがみ 湯

小田急林間カーワッシングサービス商会

東京都町田市原町田一二三七

小田急線 新原町田駅前

電話(〇四二七四)代表 三三一五

## 新日観光開発株式会社

東京都町田市原町田一二三七番地

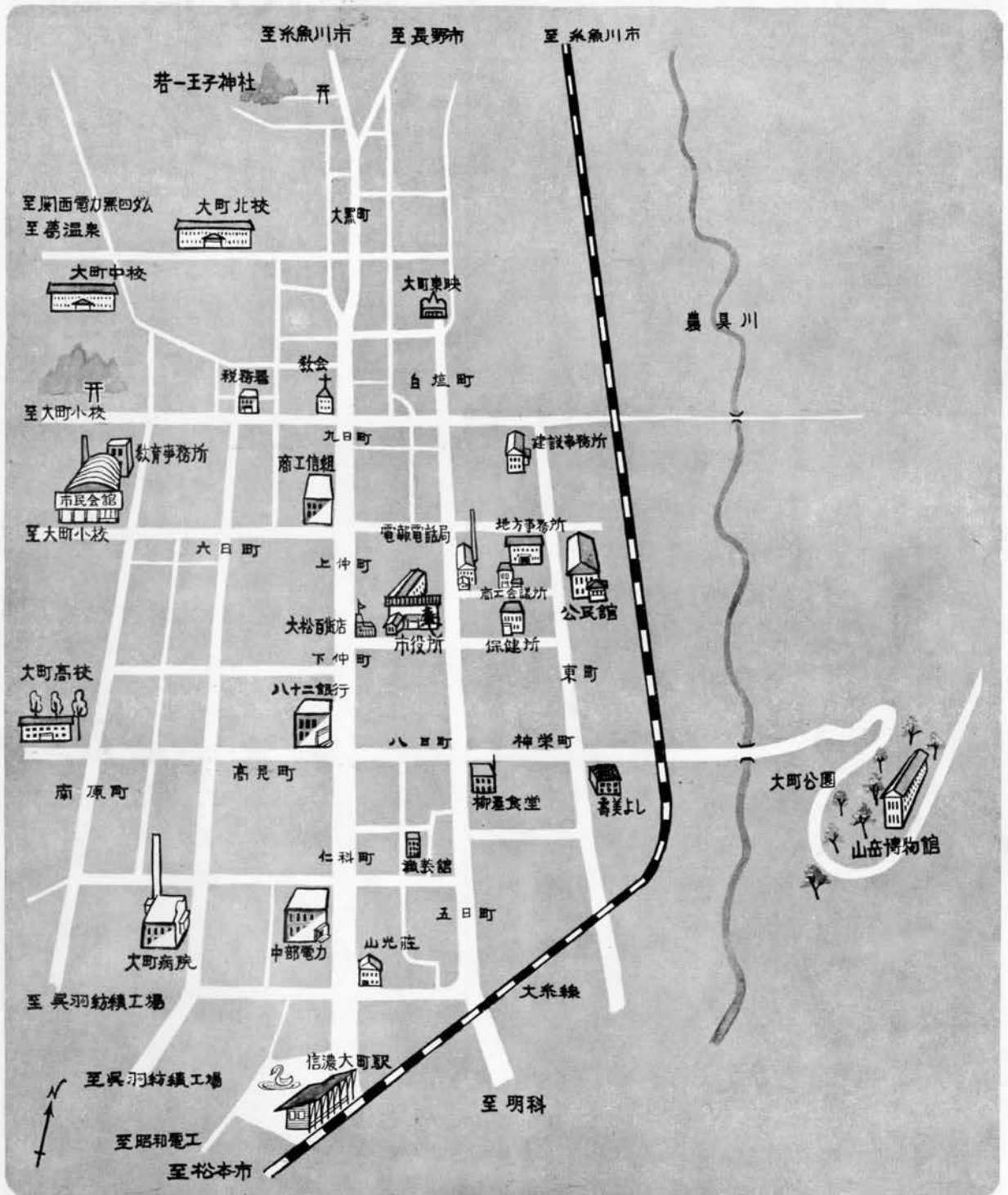
小田急線 新原町田駅前

電話(〇四二七四)代表 二九七四

# 大町山岳博物館案内図

所在地 長野県大町市神栄町

道順 大町駅→八十二銀行→踏切→山岳博物館 徒歩30分、車5分



山と博物館 第6巻11号  
 大町山岳博物館創立10周年記念特集号 (1部50円)  
 昭和36年10月25日印刷  
 昭和36年10月31日発行

発行所 長野県大町市大町山岳博物館  
 電話(大町)211番  
 印刷所 長野県大町市上仲町  
 信州印刷株式会社 大町工場